

工場で生産せられた商品の交換価値が、斯くして初めて形を現はすと、製造業者はそれと引換へに一定の金額、乃至は他の商品を獲得する。之は即ち賣渡し、若くは交換によつて獲られた價格である。即ち商品の交換価値は、その價格と云ふ形で、製造業者の手に實現せられたのである。

けれども吾々は、價格と價值とを混同してはならぬ。價值は商品が市場に持ち出されて、まだ價格の支拂はれぬ前から、商品の持つてゐるもので、價格はこの價值に對して支拂はれるものである。即ち價值は價格の原因である。更にまた、價值と價格とは、常に其の額が一致するものではない。或る品物の價格は、狀況次第で價值より多くもなれば、少なくもなる。その證據には、物は『安く』も買へれば『高く』も買へる。即ち其の價值以上にも以下にも買はれるのである。

若し物の價格とその價值とが同一であつたなら、支拂はれた價格が即ちその價值であるから、何物といへども、安くも高くも買はれぬ筈である。そこで吾々が物を『安く』または『高く』賣買したと云ふ事實は、物に對する吾々の評價は、その價格とは別物であつて、またそれ故に、價格を吾々の評價と比較して、高すぎるとか、安すぎるとか判定し得るものだといふ證據である。そこで

價值と價格とは、その性質を均しくしないばかりか、その分量に於いても、必ずしも常に一致せぬことは明白である。とは云へ、これは價值が價格の原因であると云ふ事實を妨げない。その理由は、容易に發見することが出来る。即ち價值は一つの社會的關係であつて、従つて社會状態によつて決定される。然るに價格は個人的の評價であるから、従つて個人的の動機によつて決定せらるものである。價值は價格の原因であるから、個人が價格を決定する第一の動機は、勿論その品物の價值である。尤も此の動機となるのは、その品物の實際の價值といふ譯ではなく、之だけが相當の價值であらうと云ふ、價值に對する其の人の判斷である。此の判斷が、價格を決定する第一の動機となるのである。そして此の判斷が、品物の實際の價值に對する、正確な評價であるかどうかは、いろ／＼な個人的の事情や境遇によつて定まるものである。この第一の動機を外にしても、尙ほ多くの附隨的の動機があるが、是等は何づれも、直接に個人的の性質を有するものか、さもなくば、社會状態または社會關係に對する個人的の判斷である。すべてこれ等の結果が謂ゆる『市場の値切りこぎり』といふものになる。この値切り合ひの結果として、その品物に對して實際に拂はれる價格が生じる。そして此の價格の平均が市價となる。

斯ように價格は、一個人の評價を土臺とする一個人の取捨選擇の結果であるから、或る範圍に

於いては、全然偶然的のものである。但しそれは或る一定の範囲内に限られてゐる。といふのは、價格は第一の原因——價值——の支配を受けてゐるからである。即ち價值は價格の測定せられる標準を立てるものであつて、價格は自然に、この標準に一致する傾向を持つてゐる。そして社會關係と社會狀態とに對する一個人の判斷が正鵠に近づけば近づくほど、また一個人の動機が、純粹の自己本位の考へを脱すれば脱するほど、價格は、價值によつて立てられた此の標準に一致すべきものである。斯ように價值は、市場の『値切りこぎり』の行はれる標準であつて、この『値切りこぎり』の結果として生じる價格は、おのづと其の標準價值の方向に引き着けられる。そこで現に評價をしてゐる人の判斷の上で、價格が其の物の實際の價值以下であるか、以上であるかによつて、『安い』とか『高い』とかと云ふことになるのである。

然らば、商品に價值を附與するこの社會的の要素、この社會的の關係は何であるか。細かに研究して見ると、社會的の性質を持つて居り、そして商品に、社會的生產關係の表示たる價值を附與する力のあるもので、しかもすべての商品に共通の要素は、唯だ、人間の労働である。標本的な資本主義の商品——工場生産物——の生産は、心的にもあれ、肉體的にもあれ、全然、人間の労働の適用に關する問題であつて、其の結果は單に、之に費やされた人間労働の量と質との問題で

ある。生産物に價值を附與するものは、即ちこの労働であつて、その價值を計算するものは、この労働の支出である。仕上つた生産物が市場に賣出されるのは、それが人間労働の一定の量と質とを體現したものである。又それが他の商品なり、乃至は一般的商品——即ち貨幣——と交換されるのも、同じくそれが爲めである。賣買または交換の場合には、當事者は、意識し若しくは意識しないで、交換する品物、即ち賣る品物と之に對して受取る價格との、それ／＼に含まれてゐる労働の分量を評價する。そしてそれを同等と見て取るか、または自分の方に割がよいと思へば、取引を行ふのである。質の問題も、また量の問題と見做される。即ち高級な性質に屬する労働は、普通平均の労働といふ單純な形態に還元され、一層多量の普通労働を代表するものと見做される。

けれども、茲に注意しなければならぬことは、價值は社會狀態と社會關係とを基礎とする社會的現象であるから、商品に價值を附與するのは、或る個々の事情や、乃至は生産の行はれた特別の狀況などの結果として、たまく／＼或る特定の商品に含まれてゐる労働ではなくて、その内に含まれてゐる社會的、必要な労働である。換言すれば、商品の價值は、現にその商品の生産に費やされた特定の労働から生ずるものでもなければ、また現にその生産に費やされた労働の分量から

生ずるものでもなく、社會に取つて、この生産の爲めに費やさなければならぬ、平均程度の労働の分量である。或る品物の生産に労働を支出したといふだけのことでは、その品物を交換価値のある商品とはしない。生産した品物を、交換価値のある商品たらしめるものは、労働の社會的支出である。詳しく云へば社會的生產を目的として、社會に取つて有用なものを、社會の爲めに生産することを目的とする労働の支出である。そこで労働の支出が、能く價值を創造する爲めには、それは現に評價せられる時の社會關係と社會狀態とに照して、必要な支出でなければならぬ。それには固より色々な考慮が這入るが、茲には唯だ、最も重要なものゝみを述べて見る。

先づ第一に『社會的に必要な』労働は、『平均の』労働と混同してはならぬ。平均の労働なるものは、同一の道具を使つて労働する一人々々の生産者の生産力を考察する場合に、初めて働らくものである。また『社會的に必要な』と『平均の』とは、別々のものを代表することがあり、現に屢々そうである。例へば、一つの品物の生産に費やされた労働は、それが新たな價值を創造する爲めには、斯かる品物の生産に要する労働支出の平均に照して、生産的でなければならぬ上に、何か社會に取つて必要なものを創造してゐなければならぬ。そして或る品物が社會に取つて、『必要』であるか否かを定める場合に考ふべきことは、單にその品物が一般的に有用であり、現に社會の

或る人々に取つて必要であるといふだけではなく、その社會の經濟の現状に照し、また社會の生産及び分配の一般状態に鑑みて、斯のような品物に對する慾求は、他の慾求と比較して、既に充分に供給せられては居らぬか、どうかと云ふことである。若し或る商品が過剰に——絶對的に過剰ではなくて、現在の社會關係に照して過剰に——生産せられたなら、斯かる生産は何等の新價值をも創造せぬ。とは云へ、斯ように費やされた労働が、何等の價值をも創造せぬとか、又は斯ようにして生産せられた品物には、何等の價值もないと云ふ譯では勿論ない。けれども價值は一つの社會的關係であるから、この種の過剰に生産せられた品物に費やされたすべての労働は、比例的に少額の價值を創造し、個々の品物も、それだけ少しの價值をしか持たぬ。斯くて此の品物の總計は、この追加の労働が費やされず、追加の品物が生産せられなかつた場合以上の價值を有しないであらう。

更に又た或る産業に於ては、生産要具は漸次に變化をしてゐる場合がある。そして此の變化の結果として、或る品物の生産に費やさるべき必要労働の分量が減少する。そこで斯のような過渡期にあつては、この品物の生産に費やされる労働の『平均』量は、新しい道具によつて生産する場合に必要な労働の分量よりは遙かに多く、舊るい道具による場合よりは遙かに少ない。なぜならば

此の場合に於ける平均は、新舊二様の道具が並用せられてゐる以上、兩者によつて生産せられた品物に基づいてゐるからである。けれども此の場合には、生産された商品の價値は、労働の平均出費によつて測定せられるものではなくて、新舊何づれかの生産方法による労働の出費によつて測定せられるものである。若し新生産方法がまだ充分に完成されないで、社會の必要を満たし得ないか、または新生産方法が、獨占權の目的物である場合には、評價は舊るい生産方法に従つて行はれるが、新生産方法が完成せられて居り、且つ自由に應用し得られる場合には、評價は新方法に従つて行はれる。又た或る品物が生産せられて、市場で評價せられるまでの間に、新しい生産要具が所要の能率程度に達したか、若くはその獨占權が打破せられた場合には、此の品物の價値は、それが新舊何づれの生産方法によつて生産せられてゐるようとも、生産の當時社會的に必要であつた舊生産方法による評價には従はないで、現に社會的に必要な新生産方法に従つて評價せられるものである。

そこで言葉を換へて云へば、或る商品の價値は、社會がこの商品を必要とする時に當つて、是非とも之が再生産の爲めに費やされなければならぬ労働の分量によつて、決定せられるものである。即ち其の商品の再生産の爲めに、社會的に必要な労働の分量によつて、決定せられるもので

ある。

三

上述の如く、商品の價値は、その再生産の爲めに、社會が是非とも費やさねばならぬ労働の分量によつて決定せられるものである。之はすべての商品に均しく適用せられる事であつて、全資本制度の基礎をなしてゐる特殊な商品——労働力——も亦たその例に漏れぬ。吾々が上來述べ來つたような、資本制度の生産と分配とを圍繞するすべての神祕は、この特殊な商品あるが爲めであつて、これぞ從來の社會制度には、絶対に知られてゐなかつたものである。資本主義降臨以前の、如何なる社會制度に於いても、人間の労働力が、市場に於いて取引される獨立の商品だつたことではない。人間の労働力は、其の人自身から引き離しては考へられぬほど、それほど密接な人身的の屬性と見做されてゐた。そして人間そのものは、自由であることもあれば、非自由であることもあつたが、若し人間が自由であつたならば、その労働力は彼れ自身のものであつて、自身自身の爲めに自分自身で使用せられるものであつた。若し非自由であつたならば、彼れはその労働力と其の他の人身的の屬性とを爲めに、他人のものであつた。けれども何づれの場合にも、彼れ

の勞働力は、彼れの身體から切り離すべからざるものであり、彼れの人格の一部を爲すことは、尙ほその容貌と同様であつて、常に相ひ伴ふてゐるものであつた。

然るに資本主義降臨と共に、人間の勞働力は、初めて其の身體と身柄とから引き離したものと
なり、斯くて人間の勞働力は、その人格から『抽象』せられた、一個獨立の存在物となつた。斯よ
うな意味での人間の勞働力、抽象された人間の勞働力、或る個人的特質と合體して居らず、有ら
ゆる人身的の關係から引き離された人間の勞働力は、公然の市場に於いて取引せられる一個の獨
立の商品となつた。歴史的には、資本主義を可能としたものは此の商品の出現であつて、多くの
神祕が資本制度の働らきを包んでゐるのも、亦たこの商品の特殊な性質に基づくものである。斯
ように人間の勞働力といふ特殊な商品は、その特質を以つて、資本制度の上に消し難き印象を與
へたのである。

如何なる個人的の關係からも離れ、如何なる人身的の關係からも獨立して、公開の市場に賣買
せられる人間の抽象的勞働といふ新商品は、同時に亦た、他の一切の商品の泉源であると共に、
資本家世界の元手となるべき商品の一部である。それは亦た、自分自身を復生産する手段である
から、即ち自分自身の泉源であり、自分自身の創造者である。この抽象的勞働は、資本家的商品

の一般的の泉源として、また一般的の創造者としては、是等の商品の交換價値の泉源であり、従つて其の尺度である。また自分自身の泉源として、また自分自身の複生産者としては、自分自身の價値の泉源にしてまた其の尺度である。詳言すれば、資本家的商品たる『一般的人間勞働力』の價値の尺度は、それが市場に於いて取引せられる當時の、社會の生産條件の下に於いて、その複生産に必要な『一般的人間勞働力』の分量である。商品たる一般的人間勞働力の斯ような二元的の身分こそ、資本主義的社會に於ける富の生産と分配との法則の研究者を、五里霧中に迷はすものである。そこで此の二元的の身分が適當に理解せられると、神祕は忽ち消散し、資本主義的社會の解剖學、生理學、並びに心理學は明かに觀取され、その構造と作用とは、詳細に研究することが出来る。

商品の價値は、その複生産の爲めに是非とも必要な、勞働の分量によつて決定せられることは、既に明らかにした通りである。そして生産者はこの勞働の所要の分量を、勞働力乃至は潜勢的勞働の形で公開の市場に於いて買入れ、之に對しては特別の場合を外にしては、その價値だけの支拂ひをしなければならぬ。詳言すれば生産者は、この勞働力を生産するに必要な勞働の價値だけを支拂はなければならぬ。更に言葉を換へて云へば、生産者は、勞働者がその勞働力を働かす期

間に消費する一定分量の財を、賃銀の形で支拂はねばならぬ。云ふ迄もなく此の分量は、一般に労働の生産力と、労働者の生活標準の高低とによつて相異なる。けれども如何なる場合にも、この分量は、労働者がその精力を働かせた期間に生産した財の分量よりは、必ず僅少である。この事實は、獨り資本制生産の必要條件であるばかりでなく、苟も社會の一部の人々のみが生産の仕事に従事するような、すべての社會的生產形態に取つての必要條件である。言葉を換へて云へば、現在の資本制度の下に於いては、或人が一定の賃銀を得る爲めに、毎日一定時間、その労働力を人に賣る場合には、此の賃銀によつて代表せられるだけの生産物の生産に必要な労働の分量は、彼がその傭主に賣渡した労働の總量よりは、常に少量である。然るに一般的人間労働は、その労働力を働かせた時間によつて測定するの外ないから、或る労働者の賃銀を生産するに必要な時間とは、その賃銀の支拂ひを受けて雇はれた時間よりも常に短い、と云つても同じことである。

そこで賃銀の形で労働者の手にはいる生産物の、複生産に費やされる労働の分量は、『必須労働』と名づけることが出来る。なぜならば此の範圍の労働は、生産を持續する爲めに、否な同一水準の生存を維持する爲めにすらも、絶対に必要だからである。之に反して労働者が、この『必須労働』以上に注ぎ込む労働の分量は、之を『剩餘労働』と呼んでよい。即ち、それは既に労働者

が注ぎ込んだ『必須労働』の分量以上の過剰、若くは追加だからである。そこで同じ理由によつて、『必須労働』時間で生産せられた生産物は、『必須生産物』と呼び、その価値は『必須価値』と云ふことが出来る。また『剰餘労働』時間で生産せられた生産物は、『剰餘生産物』と呼び、その価値は『剰餘価値』と云ふことが出来る。但し労働と生産と価値との、別々の部分を表す爲めに、『必須』とか『剰餘』とかといふ言葉を用ひるにしても、吾々は之によつて、一方を賞讃または是認し、他方を非難し排斥する意味を表はす積りではない。吾々は是等の言葉を、絶対に『倫理的』乃至は『鑑賞的』の意味を有しない、純然なる技術的の意味に用ひるものである。

斯ように生産に従事する資本家が、絶えずその事業に使用する商品たる労働力が、不斷に生産する剰餘価値こそ、資本主義的社會にあつて、自分では何等の生産力をもしないが、去りとて他人の生産したものを、暴力または詐欺によつて横領する譯でもなく、しかも尙ほ、現在社會の富の大部分を所有する階級の配け前となつてゐるすべての富と収入との、神祕な泉源である。労働力なる商品が、剰餘価値を代表した剰餘生産物を生産するところの特殊な能力により、今日の資本家階級は、社會の生産年額の一部を、その生産者から直接に奪取しないで、しかも能く自分の所有とすることが出来るのである。

製造業者が一日、一週、一ヶ月、一ケ年の終りに、その期間に仕上つた生産物を所有する場合に
は、この生産物のうちには、『必須』価値と共に『剰餘』価値をも含んでゐる。『必須』価値のうちに
は、労働者に支拂はれた賃銀を含んでゐるばかりでなく、生産物に形を變へた『資本』——といふ
よりも、資本のうちでマルクスが『不變資本』と名づけた部分——即ち原料や機械の出費や其他を
も含んでゐる。勿論すべて是等の原料や機械などは、それが生産せられた當時には、『必須』価値
と『剰餘』価値とを代表したものである。けれども、是等のものが生産に使用せられる場合には、
その生産物のうちで、是等のものの価値を單に再生産した部分が『必須』であつて、それは恰も、
賃銀を再生産した部分が『必須』であるのと同じ譯である。そこで彼れの所有に歸してゐる『剰餘』
は、彼れの出費と投資との全額を超過した、正味の剰餘である。即ち純所得、若くは純利潤であ
る。故に生産せられた剰餘価値の分量、従つて製造業者の收得する所得若くは利潤の分量は、既
に述べたように、單に労働時間の長短でのみ定まるものではなく、一般に労働の生産力と労働者
の生活状態によつて定まるものである。言ひ換へれば、労働者が雇傭期間中に行ふ労働のうち
の、『剰餘』労働と『必須』労働との比例によつて定まるものである。そこで労働日の長短が一定し
て居れば、労働の生産力と労働者の生活状態とは、この比例に反對の影響を與へるものである。

即ち生活状態が高ければ、其の中に含まれる『必須』労働の部分が増し、生産力が高ければ、『剰餘』労働の部分が增加する。

労働者が剰餘労働時間を働いて、剰餘價值が生産せられた上は、資本家階級全體が、その収入を抜き出しその富を『貯蓄』する基金が、ちやんと出来上つた譯である。そして残つた問題は、唯だこの基金を、資本家階級の各員の間、分配することである。この分配は、大方は各々の關係者が會合もせず、又た往々にして關係者は何にも知らず、常に關係者の同意なしに行はれるのであるから、なかく單純なことではない。即ち此の分配は、資本家的生産を支配する法則によつて、自動的に行はれるものである。そして斯ような分配が、法則どほりに行はれて居れば、即ち正則な分配である。けれども或る資本家が、他の資本家に損失を蒙らして餘分の利益を収めることも、有り勝ちである。否な個々の資本家は、いづれも皆、そうしようと試みてゐる。然しながら此の試みが成功すると否とは、上にも詳説したように、茲には何等の關係もない。吾々が茲に取り扱つてゐるのは、資本主義的社會の法則である。そこで吾々の當面してゐる問題は、労働者によつて生産せられた上、製造業者の所有となつた剰餘價值の一部が、如何にして、資本家階級の他の成員の手に渡るかと云ふことである。

既に指摘したように、すべての價值、従つてすべての剩餘價值は、この價值の體現物たる生産物が、その究極の到達點に達するまで——即ち生産物を市場から取り去つて、交換價值には頓着しないで、その使用價值を享有する消費者の手に達するまで——は實現せられない。そして商品は、消費者といふ究極の到達點に達するまでは、交換價值を持つてはゐるが、それは唯だ、潜在的に持つてゐるに過ぎない。交換價值は商品に固有内在するものではなく、單に生産及び分配の、社會的關係を表示するものに過ぎぬから、之が最後の實現——價值でなくなる時——に至るまでの間には、社會的變化の影響によつて、減少する場合がある。既に述べたように、或る品物の交換價值は、この品物の所有せられる時——即ちそれが消費者の手に達した時——に於ける再生産に必要な労働の分量である。この品物が消費者の手に達するまでには、その交換價值は絶えず變動に曝されてゐる。従つて商品がいよく消費者の手に達するまでは、その商品が幾何の交換價值を含んでゐるかは、的確には知ることが出來ぬ。ところが商品は、流通過程を通過しなければ、消費者の手に達することは出來ぬ。そして此の流通過程のうちに、商品は賣られたり買はれたりする。即ち交換せられるのである。すべて是等の取引に於ける商品の交換價值は——その獲得する價格となつて表現するのであるから——それがいよく最後の經濟的目標に達した場合の交換

價值を基礎として、割の出されるものである。

そこでこの交換價值の配け前に與づかる人々に取つては、この流通の過程に於いて、生産物に含まれてゐる剩餘價值は濟し崩つしに實現されるものである。商品がその社會的使命を果して了ふまでは、之れが生産と流通とに與づかる關係者は、その商品を賣渡して商品が自分の手を離れた時に、其の中に含まれてゐる剩餘價值の配け前を得るのである。そして彼れが受取つた商品の價值は、その商品の『必須』價值と共に、彼れ及び彼れ以前に生産と流通の過程に携はつた關係者の受くべき剩餘價值の配け前とを代表するものである。斯くてその生産當時から商品の中に含まれてゐる剩餘生産物は、それが『流通』するに従つて、漸次に剩餘價值に變化する。そして此の剩餘價值は、それが實現せられるに従つて、一部分づつ關係者によつて收得せられるのである。斯ように剩餘價值の分配は、流通過程の間に行はれるものであつて、この過程の各段階に於いて商品の賣られるそれ／＼の價格は、即ち之を表示したものである。

同一の商品が、流通過程の各段階に於いて、色々の價格で賣られることは、從來は不可解のこととして、少からず吾々を悩やました。けれども此の流通過程の間に剩餘價值の分配が行はれることを知つたなら、それは容易に理解することが出来る。即ち流通過程の一段階を通過することに、

剩餘價値の配け前が實現せられて、その價格に追加せられるのである。商品の交換價値は、製造業者が之を賣る時に先づ第一に實現せられるが、この場合の交換價値は、製造業者がこの商品に對して受ける價格として實現せられた部分の交換價値に止どまつてゐる。そして其れは商品の『必須』價値と、剩餘價値のうちで製造業者がその利潤として受ける部分とを代表するものである。

商人が製造業者に價格を拂つて此の取引をするのは、商品に含まれてゐる剩餘價値が、まだ全部は實現せられて居らぬから、これを小賣商人乃至は消費者に轉賣する場合に、自分の收益として、尙ほ其の上の剩餘價値が實現できると期待するからである。そして之は亦た、營利事業の普通の道程に起つてゐる事柄である。且つこの動作は、商品がその流通の諸段階を通過して、社會的到達點たる消費者の手に到達するまでは、反復せられるものである。斯くして消費者の手に達した時、その商品のうちに含まれてゐる剩餘價値の全額は、消費者の支拂ひのうちに初めて實現される。そして此の價格は商品の全價値、即ち『必須』價値をも『剩餘』價値をも残らず代表するものである。

各々の『利害關係者』が、剩餘價値の配け前に與づかる法則、流通過程の各段階に於いて、商品に對して異つた價格の支拂はれる法則——この法則そのものも、また資本制度の下に於ける特

殊な商品(勞働力)の結果であり、その根柢に横はつてゐる特殊な商品(勞働力)によつて印象せられて居る。従つて資本家階級間の利潤の分配は、絶対に非人格的作用である。それは又た、生産及び分配の過程に關與する種々なる要素が、絶対に運動の自由を持つことを必要とする。苟も運動の絶対的自由がない場合には、資本家間に於ける剩餘價値の分配を支配する法則は、獨斷的に阻止せられ、時としては全く廢止せられる場合もある。之は價値に關する一切の法則、従つて剩餘價値の生産と實現とに關する一切の法則は、運動の絶対的自由を必要とするといふ、さき述べた觀察から、必然に伴ふべき事柄である。

市場にその勞働力を賣らうとする勞働者のあることは、同じ市場に、その資本の用途を求め資本家のあることを前提とする。また商品としての勞働力の存在は、賣らんが爲めの勞働力を所有する勞働者が、この力を生産過程に應用するに必要な生産用具を、自分で所有して居らぬといふ事を前提とする。それは又た、生産技術が高度に發達してゐること、そして勞働の生産力が、單にそれ自身を再生産するに過ぎない程度よりも、遙か以上に發達してゐることを前提とする。そして其の勞働は勢ひ剩餘價値を生じ、その剩餘價値の一部分は、後日の生産に使用する目的で『貯蓄』せられて居らねばならぬ。更にまた、過去に於いて生産せられた剩餘價値のうちから『貯蓄』し

たものは、労働力を賣らうとする労働者の所有でないことを前提とする。そして過去の剰餘價値の『貯蓄』せられた部分の所有者——即ち資本家——は、この『貯蓄』——即ち資本——を、將來の剰餘價値の生産に使用する。彼等は其の爲めには、この資本の一部を割いて労働力を買入れ、そして之によつて生産せられた剰餘價値の全部を收得する。尤も資本家は、剰餘價値を親しく自分で收得する譯ではない。労働力によつて生産せられ、そして凝縮し聚積せられた剰餘利潤であるところの資本は、その産みの親たる労働力が非人格的であり抽象的であるように、同じく非人格的にして抽象的である。そこですべての剰餘價値を鵜呑みにするのは、その所有者たる資本家には無關係な、斯ような意味での資本そのものである。時としては資本家は、自己の才能によつて、その資本に、他人の企て及ばぬ餘分の剰餘價値を生産せしめることもある。この場合には、それは餘分の利潤として彼れのものとなる。けれども資本家的生産と商業との普通にして正則な利潤は、使用せられた資本に歸するものであつて、資本家その人に歸するものではない。

或る商品を生産してその價値を實現する爲めには——即ち詳言すれば、商品を究極の消費者に引渡してその價格を受取る爲めには、一定期間の間、一定の資本額が、是非とも入用である。生産及び流通過程の種々なる段階に於いて、是非とも使用せられねばならぬ資本の分量と、期間の

長さとは、云ふ迄もなく生産及び交換の機關の發達狀態——其の内には運輸及び交通の機關をも含めて——によつて違ふだらう。けれども一定の生産及び流通狀態の下に於いては、商品を生産し、之を消費者に齎らす爲めに必要な資本の分量と、之を使用する期間の長さとは、常に同一である。

既に觀察したように、商品に含まれてゐるすべての剩餘價值は、商品生産の過程中に生産せられて、製造業者の所有してゐるものであるが、この剩餘價值は、商品が流通過程に止どまつてゐる間に、その生産と流通とに關與した資本家之間に分割せられるものである。然しながら嚴密に云へば、既に觀察した通りに、この剩餘價值は、商品の生産と流通とに關與した資本家之間に分配せられるものではなくて、各々の商品が、その一代のうちに經過するこの二つの過程の間に使用せられた、種々なる資本の間に分配せられるものである。そして是等の資本が各々剩餘價值の中から受ける分配額は、商品の生産と流通との、何づれかに是非とも使用せられねばならぬ是等の資本の大きさと、期間の長さとの比例する。詳しく云へば、その商品の生産と流通との過程に要した一切の時間（例へば一日といふが如き一定の單位で勘定して）の間使用せられた資本の總額を、一定の單位（例へば一圓）を以つて計上し、その商品のうちに含まれてゐる剩餘價值の總額を

之で割ると、時間の單位と資本の單位とに對する剩餘價値の額が知れる。即ち之を指して利潤率と呼ぶのである。そこで各々の資本が受ける分配額は、自分自身の大きさに、使用せられた時間を乘じ、更に利潤率を乘じたものである。

製造業者は、商品が出来上るや否や、之を賣つて先づ價値の最初の實現を行ふが、この場合に製造業者の受ける價値——即ち其の商品の價値の實現せられる價格——は、その商品が消費者の手に這入つて、いよいよ完全に社會的機能を満たそうとする場合の、實際の價値を表示するところの、其の商品の最終の價格ではないのである。これは單に中間的の價格であつて、マルクスは之を『生産價格』と呼んでゐる。この中間價格は、商品の價値に従つて消費者から受取らるべき、究極の價格を土臺として定められる。そして商品の全價値を代表する此の豫期せられた究極の價格によつて、初めてその商品に含まれてゐる剩餘價値の全額が確められるのである。そこで商品の剩餘價値が一定して居れば、『生産價格』は、商品に含まれてゐる『必須』價値に、製造業者の資本が剩餘價値の中から受くべき分配額を加へたものである。商品に含まれてゐる『必須』價値は、製造業者に取つての生産費を代表する。とは云へ製造業者は、商品の生産に費やしただけのものを回収するに過ぎぬと云ふ譯ではない。商品の『必須』價値が代表して居るのは、實際の生産費ではなく

て製造業者が之を賣る瞬間に、それと同じ商品を生産する爲めに社會的に必要な費用である。そこで若し實際の生産費が之れ以上に掛つて居つたなら、製造業者はその差額だけ損失する。若し之れ以下の場合には、彼は餘分の利潤として、此の差額を懐にする。

商品の流通過程の各段階に於いて支拂はれる價格も、之と同じようにして定められる。即ち次から次に現はれる賣手は、その受取る價格のうちに、商品の必須價值と剩餘價值の配け前とを加へたもの、即ち前掲の法則に従つて彼れと彼れの先進者とが、剩餘價值の中から受くべき配け前を加へたものを收得する。彼等は各々、自分の支拂つたもの、乃至は自分の投資したものと、尙ほ其の上に残餘價值に對する自分自身の配け前とを收得する。但し之は其人が、正當の價格で賣買した場合のことであつて、さもなくば、或る一人は自分の配け前以上を取り、他の人は其の配け前以下を受けることになる。けれども之に關係した資本家全體として見れば、彼等は生産過程に於いて生産せられた剩餘價值の全部を收得するだけで、それ以上のものを收得する譯ではない。でないとすれば、労働者が正當な支拂ひを受けなかつたか、さもなくで消費者が不當の價格を拂はされてゐる譯であつて、此の場合には、之に關係した資本家が、餘分の利潤を收穫することゝなる。又た労働者が過大に支拂はれ、消費者が過少に支拂つてゐる場合には、直接これに關係し

た資本家が、損失を蒙ることになる。

以上の説明を通じて、資本家は各々、自分自身の資本を以つて事業を営んだものと假定してある。そこで若し自分の資本を持たぬ場合には、彼は利潤の形で受取つた剩餘價值の一部なり全部なりを、利子の形で資本の貸主に引き渡さねばならぬ。けれども此の場合も同じことであるから、茲には論及せぬ。吾々は又た地代の問題、並びに流通過程のうちに商品に加へられることのある、追加的作業の問題をも、茲には論じない。是等の問題は、吾々の研究題目——資本制度に於ける富の生産を支配する法則と、資本主義的社會の各階級間に富の分配せられる模様と——に何等の影響をも與へぬからである。

第五章 勞働價值説と其の批評家

一

本書の序論に於いて、唯物史觀の批評とその批評家とに論及した際、吾々は唯物史觀に對する先入の偏見が、この學説の功績に對する公平な考察を妨げ、それが爲めに唯物史觀に關する議論が、甚だしく不明瞭となつてゐることを見た。ところがマルクスの價值及び剩餘價值學説の批評に關しても、吾々は同じことを繰り返さねばならぬ。否な寧ろ、一層それを力説する必要がある。少くとも此の學説に對する反對批評の一半は、先入の偏見に基づくと云つて差支へない。そして此の偏見の爲めに批評家の視覚は蔽はれ、その思索の装置は狂はされてゐる。この偏見は、或る特殊の部類に屬する批評家に限つたことではなく、それは尊嚴ある學者にも、鬭争的の評論家にも、均しく影響を與へてゐる。『科學的』なオーストリー經濟學派の首領にして先鋒たる大ボエム・バワークとお喋りで『通俗』なマサリック教授とは、どちらも好個の雛形である。ボエム・バワークは資本と利子に關する大著(註一)の百頁以上を、この學説の批評に費やしてゐるが、彼れの考

究は、この學說を『搾取セオリ・オウ・エクスプロアリエーションの理論』とすることに出發點をおき、その議論の全勢力は、一個の

客觀的の目標に向けられてゐる。即ち資本家の収入は搾取の結果であると云ふことを以つて、此の學說の主要な論旨であると假想し、この立言が事實に反してゐること、そして實際に於いては、労働者は現在の制度の下に、當然自分に歸すべきものは悉く收得してゐることを證明することに、全勢力を向けてゐるのである。そして彼れはこの論争を以つて、資本制度の倫理的功罪に關する問題と解してゐるらしく、彼れの推論全部は、この色彩を帯びてゐる。マサリックとても其の通りである。彼はマルクス說に關する浩瀚な著述に於いて、次の如き序論によつて、價值及び剩餘價值問題の考究を始めてゐる。

『社會學上から觀れば、剩餘價值の概念は最も重要である。剩餘價值は、階級とその相互關係——即ちその鬭争——に就いての社會的概念を經濟的に表はしたものである。剩餘價值なる言ひ表はしは、資本主義的秩序と文化との全體を特徴づけ、且つ之を非難するが爲めに案出せられたものである。それは明々白々である——「資本論ダス・カピタル」は積極的の經濟學說ではなくて、その

副標題によつても暗示せられてゐる如く、今日に至るまでの經濟學に對する批評である。「資本論」は、資本家的搾取の理論を提出する。それは資本主義的誅求の教科書であり、同時に之が猛

烈な非難である。であるから「資本論」は、同時にまた社會主義的革命の理論である——然り、革命そのものである。

『既に述べた通り、吾々はその批評を、價值及び剩餘價値の觀念に集中するであらう。そして吾々は、労働——無産階級の労働——が果して經濟上の價值と剩餘價値との、唯一の泉源であるか否かを考察するであらう。斯ような考察は、現代文明の社會的秩序が、眞實に、資本家階級による無産階級の搾取を意味してゐるか否かを、正直に示すのである——斯くて資本の批評は、やがて階級闘争説の考察となるのである。』

註一 オイゲン・フォン・ボエム・バワーク『資本と利子』インスブルック、一九〇〇年。(Eugen von

Böhm-Bawerk, *Capital und Capitalins.* Innsbruck, 1900). Karl Marx and the Dilemma of his system. T. Fisher Unwin.

そこで吾々は前章に於て、労働または價值に關聯して、『必須』とか『剩餘』とかといふ形容詞を用ひても、それは決して一方を賞讃または是認し、一方を非難または排斥する意味を表はそうとするものでないことを、殊更に注意したのである。また事實に於いても、マルクスは資本家が労働者にその労働力の正當な市價を支拂つてゐる場合には、彼は労働者に、當然拂ふべき一切のものを支拂

つたのだと云ふことを、繰り返へして述べてゐる。マルクスは、資本制生産の過程を記述するについて、社會が既に持つてゐるものの復生産に是非とも用ひなければならぬ労働の分量と、更にそれ以上に、新たな商品乃至は新たな價值を生産する爲めに、是非とも用ひられなければならぬ追加の労働の分量とを區別する爲めに、『必須』と『剩餘』といふ言葉を使用した。彼は事實を、唯だその見がまゝに記述しようとしたもので、何人からも辯護を頼まれた譯ではない。若しマルクスの價值及び剩餘價值説と、マルクスの資本制度に對する批難とが、何等かの因果關係を持つてゐるとしたならば（この問題の決定は後章に譲る）、彼れの價值及び剩餘價值説は恐らく原因であつて、資本制度に對する非難はその結果である。少くとも其の逆ではない。マルクスは、價值及び剩餘價值を考察するに當つて、彼れが辯護しようとしてゐる豫定の立言の影響を蒙つて居るといふ、多くの批評家の陳述は、全然虚偽である。そして是等の批評家の著述のうちには、この斷定の證據を豊富に含んでゐる。いづれ後章に於て、近時のマルクス批評家間の流行となつてゐる、謂ゆる社會主義運動の倫理學説なるものを論議するつもりではあるが、之によつて、マルクスをして價值及び剩餘價值の研究に没頭せしめ、遂にその學説を樹立するに至らしめたものは、唯だ絶対至純な眞理に對する彼れの熱烈な憧憬であつたと云ふことが、疑ひの餘地なきまでに明瞭となるだらう。

マルクスが其の研究の首途に於いて當面し、そして彼れの手によつて解決を與へなければならなかつた問題は、價值及び剩餘價值の學說に含まれてゐるような此の問題に對する彼れの解決は、眞の解決であるかどうかと云ふことであつた。之は今ま吾々の前にある唯一の問題であり、また少くとも唯一の問題たるべきものである。何等の先入の偏見をも持たずに觀察して、マルクスの價值及び剩餘價值の學說は正確であるか。茲には遺憾ながら餘白がないので、マルクスの價值及び剩餘價值學說の考察に入るに先つて、この問題に對する他の諸學說を考究することが出來ぬ。斯ようにマルクス說以外の種々なる學說を吟味して、之を並べて觀ることは、今ま吾々の當面してゐる問題に對する、眞の解答に達する大なる助けとなるものである。そこで他日この著述を完成して、マルクス說の相對的地位を充分に評價することは、著者の希望とするところである。然しながら本論に於いては、寧ろマルクス說と他の學說との相對的の評價よりも、謂はゞ絶對的の標準によつて議論を進め、他の價值學說に就いては、マルクス說に向けられた主なる批評を論議する爲めに絶對に必要な程度に限つて、論及するに止どめなければならぬ。殊にその起源と普及とに於いては、英國も墺國同様の權利を持つてゐるにも拘らず、尙ほ墺國學派として廣く知られてゐる謂ゆる近代的價值學說に就いては、特に本論の中に言及する。尤もこの墺國派價值學

説に『敬意』を表するのは、其の獨創と重要との爲めよりも、寧ろ近時のマルクス批評家間に大に持て囃やされてゐるからであつて、彼のボエム・バワークその人は、茲に論じようとする研究の領分に於いては、此の學派の音頭取りである。

本論の一章に於いても既に述べた通り、反マルクス批評の桶は、めい／＼自分の底の上に立つことを主張し、また立つの権利がある。そこで吾々は、マルクスの價值及び剩餘價值學説を論ずるに當つては、その目標を大部分、ボエム・バワークの提出にかゝる議論に限らなければならぬ。之には二重の理由がある。第一には、ボエム・バワークは、その戦友たちに比らべて遙かに勝ぐれて居り、この問題に對する權威は、彼等によつて承認せられてゐるから、彼等一同の見本としてボエム・バワークを摘まみ出しても、恐らく是等の批評家に對する不公平の非難はないからである。第二には、價值及び剩餘價值學説に就いては、是等の批評家間には可なり多くの一致があるようである。そして他の批評家の提出した議論は、明白に斷はつてボエム・バワークから借用したのもも屢々であるし、さもなくばボエム・バワーク説と異曲同音のもので、格段の注意に値ひする程のものではない。けれども斯ような變種が、一個の特異を生ずる程度に明白になつてゐる場合には、獨立の出所を有する議論と同様に、相當の取り扱ひをしたいと思います。

ボエム・バワークは先づ劈頭に、マルクスの先輩中、苟も労働價值説を全部にせよ一部分にせよ信奉した學者は、アダム・スミス、ダヴキド・リカルド、カール・ロドベルツスのような斯學の大立物といへども御多分に洩れず、皆な労働價值説を證明しようとはしないで、實は『假定』したものであると云つてゐる。即ちそれを支持する推論らしいものも無い、たゞ彼等の勝手氣儘な主張に過ぎないものであつた。然るにカール・マルクスは單に労働價值説を主張したばかりでなく、之を證明しようとして試みた最初の人である。此の點ではボエム・バワークは、マルクスが彼れに先だつ幾多の經濟學の大なる光明にも優ることを認めてゐる。けれども彼は、マルクスの取つた證明の方法は好まなかつた。そしてマルクスが其の學説を支持する爲めに提出した證據には、信服しなかつた。そこでボエム・バワークは、さすがに良教授だけあつて、マルクスは其の價值説を證明する爲めに、どんな方法を取るべきであつたかを吾々に示して呉れ、且つマルクスが實際取つたと假想した方法に對しては、力をこめて反對を表してゐる。即ち彼は斯う云つてゐる——マルクスの爲めには二つの道が開かれてゐた。即ち第一には、交換過程の原因となるべき『心理的動機』を分析すること、第二には、交換關係の實際上の經驗を考究することである。然るにマルクスは、此の二つの途の何づれをも取らないで、第三の寧ろ風變りの方法——即ち純然たる演釋と辨證法的推

論との方法を採用したと。

マルクスが交換の『心理的動機』の分析によつて、交換價値の眞法則を發見しようとしなかつたことは、全く其の通りである。そして吾々は既に前章に於いて、その理由を見た。此の問題の解決は、何等かの社會現象の中に存するものであつて、交換關係に這入つて來る各個人の性質に求むべきものでないことは、この問題の性質自體が明らかに示してゐる。であるから交換の『心理的動機』なるものは、マルクスの當面した問題とは、思ふに何等の關係をも持ち得ぬものであつた。のみならず人類の歴史を通じて、一定不變な『心理學的』乃至は其の他の『自然的』の動機は、すべての人類社會に共通して居らず、また時間的にも空間的にも、人類社會の一小部分にのみ嚴密に限られてゐるところの、資本主義の生産分配といふ現象に對しては、原因である筈もなければ、また何等の説明をも提供し得ないことは極めて明白であつた。これは唯物史觀を論ずる場合に觀察したのと同じことである。即ち不變の要素は、動作の結果として現はれた變化の、原因となることは出來ないと云ふことである。

更にマルクスが、交換關係の實際上の經驗をする方針を取らなかつたと云ふのは、眞實でない。またマルクスの採用した道は、純然たる論理的演繹であつたと云ふのも、本當でない。マルクス

はボエム・バワークの要求通り、交換關係に就いての實際上の出來事と『經驗』とを十二分に研究した。尤もこの仕事は、ボエム・バワークの思つたほど、それほど甚だ單純なものではなかつたのである。それにも拘らずマルクスは、交換關係の實際上の『經驗』のうちから、値打ちのあるものを學びたいと思ふて、是等の『關係』を極めて綿密な分析に附した。この分析を行ふ場合に、マルクスが極めて鋭利な純論理的の推論を用ひたいといふ罪は確かにある。然し之れはマルクスとしては止むを得ぬことで、マルクスは何をやらせても、彼れの論理を用ひざるを得ないように、『自然』に出來てゐた。そして其の論理たるや、最も純粹な論理であつた。然しながら、彼の價值または剩餘價値の學說を證明する爲めには、マルクスは何等の純然たる論理的の推定乃至は抽象を用ひては居らぬ。マルクスの行つた抽象にいつては、本論を進めるに従つて、一々論及する積りであるが、何づれも皆な是認すべきものであるばかりか、研究の主題そのものが之を必要として居るのである。けれども彼は、何等の純論理上の概念からも抽象からも出發してゐないし、また何等の純論理上の推定にも進んでは居らぬ。之に反してマルクスは始終その土臺の上に確立して居つた。そして此の土臺は、資本主義の生産と交換との事實といふ堅固な立脚地であつた。マルクスの經濟學上の著作は、その全卷を通じて、『經濟人』や、若くは『心理的』にせよ其他のものにせ

よ、經濟人の想像的の性質などのことを、少しも書いて居らぬことは、極めて意義あることである。如何なる種類の抽象的の人間も、彼れの議論には這入つては居らぬ。マルクスはその全著述を一貫して、嚴密に彼れの問題を把握してゐる。そしてそれは資本制度といふ實際の歴史的形勢のうちにあける、實際の生きたる人間の行爲である。この點に就いては、資本論開卷の一節を、マルクス以前及び同時代の著名な經濟學者の著者のそれと比較することは、單に好奇必の爲めばかりではないのである。

マダム・スマイスの『國富論』は、次の如き一節を以つて始まつてゐる——『各々の國民の年々の勞働は、その國民が年々消費する一切の生活上の必需品と便益とを、その國民に供給する資源である。そして此の資源は常に、勞働の直接の生産物か、乃至はその生産物を以つて他の國民から買つたものから成り立つてゐる』

リカルドの『^{プリンシプルス}經濟學原理』の冒頭は斯うである——『土地の生産物——即ち勞働と機械と資本との結合した適用によつて、地表より得られた一切のものは、社會の三階級の間分配される。即ち土地の所有者、その耕作に必要な元手若くは資本の所有者、及び土地の耕作に當る勞働者である。けれども社會進歩の段階の異なるにつれて、地代、利潤、賃銀の名目の下に、地上の生産

物が是等の三階級に分配せられる割合は、非常に異つてゐる。そして此の相異は、主として土地の實際の肥沃度、資本の蓄積と人口、並びに農業に使用せられる技術、器具によつて定るものである。』

英國に於ける『墺太利』學派の棟梁、ジエヴォンスは經濟學原理の著述を、次の如き文句で初めて
 みる——

『經濟學は、明白に性質の單純な、少數の觀念を基礎とするものである。効用、富、價值、商品、労働、土地、及び資本は經濟學の要素である。そして苟も是等の諸要素の性質に通曉した者は、何人といへども經濟學全體の知識を持つてゐるか、さもなくば直ちに之を獲得することが出来得るのである。殆んどすべての經濟學者が云つてゐる如く、最大の注意と用心とを要するものは、單純な要素を取り扱ふ場合である。概念の上の極く些細な誤謬は、悉く吾々の演釋を傷つけるからである。それ故に私は次の數頁を、上に掲げた觀念の條件と關係との考究に捧げたのである。』

ボエム・バワーク其の人の、資本に關する書物の開卷の一節は斯うである——

『資本を所有する者は、原則として、その資本から連續的の純收入を抜き出すべき地位に立つ

てゐる。此の収入は學問上では、資本の使用料、若くは廣い意味での資本の利子として知られてゐる。そして之は資本家自身の如何なる活動とも無關係に生ずるものである。即ち之を創造する爲めに、曾て指一本動かさなくても這入つて來るのである。そこで如何にも之は、資本から流れ出るものであるかの如く思はれる。古い喩への言葉を借れば、資本が産んだかの如くに思はれる。』

是等の偉大なる斯學の明星は、いづれも皆な、時と場所との辨へなく、人類社會を支配する一般的の法則を、手つ取り早く立てようとして居るらしい。彼等は皆な、その證明しようとしてゐる法則は、空間に於いて普遍であり、時間に於いて常住であるところか、決して普遍的に適用の出來ないものであり、更にまた、一定の社會状態にのみ限られたものだといふ事實を失念したらしい。彼等のうちの一人といへども、彼等が記述し考究しようとして居るところの現象は、一定の歴史的形勢の一部分であり、一定の歴史的發展の結果であるといふ事實に、氣がついたらしいものはない。實際にして眞實な事實と關係とを意味する歴史は、彼等に取つては存在せぬ。すべての國民、全べの時代、そして人類發達のすべての段階は、彼等の設けた法則に隸屬するものである。彼等の中の一人、しかも偉大なる『近代的』のジエヴォンス、かの『近代的』學派の三頭政治

(ジェヴォンス——メンガー——ボエム・パウルク)の一人に取つては、經濟學の法則は、常に歴史の外に立つものであるばかりか、苟も實在性らしいものを持つた其他の一切のものゝ外に立つものであり、そして畢竟、純然たる論理學上の數個の『觀念』に歸着するものである。そして是等の論理學上の觀念に對する正確な『概念』さへ持つて居れば、生活上の事實に對する知識の有無には全然お構ひなく、人をして能く經濟學を理解せしめるのである。生活上の事實の如きは、吾が偉大なる『近代的』の科學者に取つては、全然無視してよいほどの分量であるらしい。

翻つてマルクスの『資本論』開卷の文章を、すべて是等のものと對照せよ——『資本家的生産方法の行はれてゐる社會の富は、商品の形大な集積といふ形を取る』。雄勁な筆力によつて、一言にして問題のすべての條件と限界とが與へられてゐる。畫像はその歴史的の位地に箴められてゐる！。空間と時間とを超越して空中に舞ひ上つては居らぬ。一般的にはすべてのものに當て箴まるが、さりとて、格段には何ものにも當て箴まらぬような概念ではない。それは焦眉の問題を持つた現實の、活きたる形勢である。概括のうちに自己を見失つたり、有ゆる種類の『觀念』や『觀念』の定義に浮身をやつす代りに、マルクスは慕らに同題の核心に突進し、そして直ぐさま、『それ故に吾々の考察は、商品の分析を以つて始めねばならぬ』と宣言したことは、怪しむに足ら

ぬ。斯くてマルクスは、直ちに商品の分析に進んだ。彼は如何に此の分析を行なつたか。

マルクスがこの分析を、全然、批評家諸君のお氣に召すようにやらなかつたことは、確かである。けれども批評家諸君の不満足は、主として、諸君の方でマルクスの事業を理解し得ない爲めであることは、後に見る通りであつて、例べば、マルクスは純然たる論理學的の推論を用ひたといふボエム・バワークの主張の如きは、即ち其の一例である。若しまた、是等の批評家がマルクスを理解して、尙ほ且つ彼れの推論に不満を抱くなら、それは彼等が此の主題そのものに就いての、知識の缺乏によるものである。

例へばスロニムスキーは、マルクスの分析では『労働の概念が、それを着手する目的と必要から獨立したものと成り』、労働によつて創造せられた價值は商品の有用なこと、並びに交換價值には無關係に、商品に固有内在する獨立の性質となる』といふ理由で、彼れの分析に反對する。マルクスに従へば、商品の交換價值はその交換價值とは無關係に、商品に固有内在して居るといふ、明白に不條理な記述は暫らく見逃がすにしても（マルクスは唯だ二種の價值を認め、即ち使用價值と交換價值である、そしてマルクスが單に『價值』と云ふ場合には、それは交換價值を意味してゐる）、この記述には、觀過すべからざる不正確が含まれてゐる。

先づ第一に、マルクスは決して生産の着手せられる『目的と必要』とを忘れなかつた。事實はまるで逆さまであつて、此の考へは常にマルクスの念頭にあたつた。そしてマルクスがその批評家ら、殊に『近代的』の諸君が陥入つた悲惨な誤謬に陥入らなかつたのは、この事實によるものである。是等の紳士諸君は、交換の『心理學的』動機が、價值の原因であり尺竅であるといふ。そして商品は交換せられる前に、生産されねばならぬといふこと、従つて何よりも先きに、先づ生産の『心理學的』動機がなければならぬと云ふこと、そして此の生産の心理學的動機の研究こそ、非常に興味あるものでなければならぬと云ふことは、何時も忘れてゐる。ところがマルクスは左様でない。彼は常に、現在の資本制度に於いては（マルクスは其の批評家とは違つて、曾て永遠を語らないで、現在の資本制度を語つてゐることを記憶せよ）、生産は利潤收得の目的で着手せられてゐることを記憶する。これはやがて二つの事柄を含蓄する——第一には、生産者は使用價值を目的として物を生産せぬ。彼は使用價值には目も呉れぬ。使用價值は彼には全然、不用である。彼は聖書を製造するように、チウインガムを製造することを躊躇せぬ。そして第一には、彼は之から生産しようとする生産物の價值を前以つて知つてゐる。少くとも知つて居る積りでゐる。言葉を換へて云へば、彼れの生産物の價值は、未來の購買者の、或る個人的『心理學的』の動機を基

礎とする氣紛ぐれの『慾求』よりは、もつと具體的合理的な何物かに據るものだと言ふことを知つてゐる。そこでマルクスの方では、斯ような資本制生産の目的を知つて居るからこそ、彼は或る特定の商品の、有用な性質を離れて抽象を試みもしたのであらうし、又た交換の『心理學的』動機の考究といふ途から交換價値の法則に到達せよと云ふ、ボエム・パワーの折角の忠告にも従はなかつたものだらう。

それからマルクスに従へば、交換價値は商品に固有内在するもの、乃至はその有用な性質とは獨立したものであると云ふ記述も、また幾分不正確である。既に見た如く、交換價値は商品に固有内在するものでもなく、また固有内在すべきものでもない、なぜならば、それは社會關係と共に變化するからである、之に反して交換價値なるものは、全然、社會關係の現はれに過ぎないものであつて、一定の社會組織の下にのみ現はれるところの現象であることは、マルクスが取り立てゝ云つてゐるところである。又前にも述べた通り、マルクスは如何なる商品も、使用價値を持つてゐないでは交換價値を持つことは出來ぬこと、使用價値は交換價値の原因でも、また尺度でもないが、前者は後者の基礎であることも、マルクスは取り立てゝ云つてゐる。果して然らば、マルクスは矛盾してゐる！。憐むべきマルクス！。何人もマルクスはたわごと噤言をいふ狂人であるとい

ふ結論に達せざるを得ないほど、彼は甚だしく且つ根本的に矛盾してゐる。そして博學聰明な紳士諸君の大軍が、斯くも憐れな氣狂ひの樂書に祟はされてゐるのを見て、何人も奇怪に感じたらう。

マルクスを以つて、價值問題の研究に従事した最大人物の一人と考へてゐるボエム・バワークは、同時に亦たマルクスが、商品の効用がその交換價值に及ぼす影響を閑却したといふ、假想的の缺點を見付けて大喜びをしてゐるのである。ボエム・バワークは、マルクスは矛盾してゐるとは云はないが、マルクスの心的大失態を捉へたと思ふてゐる。そして之ぞ實にボエム・バワークの、マルクスの商品の分析に對する駁論の、よし唯一の要點ではないまでも、最大要點の一つである。マルクスは云つて居る――

『商品の交換價值は、すべての商品に共通な條件によつて表示し得られる筈である。そしてすべての商品は、この共通なものゝ、多いか少いかの分量を代表するものである。この共通な『或る物』は、商品の幾何學的、化學的、乃至は其他の自然的の性質である筈はない。斯かる性質は、唯だそれが商品の効用に影響し、商品を使用價值とする範圍に於いてのみ、吾々の注意に値ひする。けれども商品の交換は、明らかに、使用價值から全然抽象されてゐることを以つて特徴

とする行爲である。そこで或る使用價值は充分の分量さへあれば、他の使用價值ほどに良きものである……商品は、使用價值としては何よりも先づ、性質を異にしたものである。けれども交換價值としては、商品は單に異りたる分量である。従つて其の中には、微塵ほども使用價值を含んでは居らぬ。そこで若し吾々が、商品の使用價值を考慮の外におくならば、商品には唯だ一つの共通の性質が残される。即ち労働の生産物であるといふ性質である。然しながら労働の生産物そのものすらも、吾々の手で變化に遭遇した。若し吾々が、その使用價值から抽象するならば、吾々は同時に、その生産物を或る一つの使用價值たらしめるところの物質的の要素と形態とからも、抽象をすることとなる。吾々は最早や一つのテーブル、一つの家、糸、乃至は其の他の有用な物を見ぬ。有形物としての存在は見えなくなる。それは最早や指物師、石工、紡績工の労働の生産物と見做すことも出来ねば、また其の他の一定の種類の新産的労働の産物とも見做すことは出来ぬ。そして生産物そのものゝ有用な性質と共に、吾々はその生産物に體現せられた色々の種類の労働の有用な性質をも、また其の労働の具體的形態をも、共に眼中から取り去つてしまふと、其の跡には、全ての生産物に共通なもの以外には何も残らない。全ての生産物は唯だ一つの同じ種類の労働、即ち抽象した人間の労働に還元せられるのである。』

之に對してボエム・パワーは云ふ——『労働と效用との差は何處にあるのか。商品の交換關係には、交換せられた品物の特定した有用な性質が何の關係もないと云ふ事は眞實であるが、商品の一般的に有用な性質からは抽象せられて居らぬ。之と反對に、一般的に有用な性質は、依然としてすべての商品に共通してゐる。商品が食物として使用し得られるか、装身具として、または住居として使用し得られるかは、無關係である。けれども其れは何等かの用途があると云ふこと、一般的に用途があると云ふことは關係がある。然らば何故に、效用は交換價值の原因たり尺度たることを拒まれるか。何故に效用から『抽象』せられるのか。更にマルクスは労働を考察する場合にも、商品に含まれた労働の特定の性質から抽象して、一般的の労働、抽象した労働が、全ての商品に共通に残るようになければならなかつた。丁度それと同じように、すべての商品には一般的の有用性、抽象せられた有用性が共通に残つてゐる。有用性の場合に認めないことを、労働の場合に認める此の不公平は何故であらうか。一方を容れて他方を斥ける、此の差別の理由は何處にあるか。そして此の差別こそ、一方をして價值の唯一の原因たり尺度たらしめ、他方には、此の現象に對する何等の影響をも認めしめないのである』。ボエム・パワーは、さもマルクス説の理論上の建築物が、此の一撃で粉碎されるかのように、勢ひ込んで云つて居る。そしてボエム・パワー

クは無邪氣にも、マルクス説の建築物を粉碎したと思ふてゐるのである。

マルクスは果して、是等の疑問に煩はされたであらうか。吾々は固よりそれを知つてゐるとは云はぬ。けれども、吾々はこれだけのことを云ふに躊躇せぬ。假りにマルクスが、是等の疑問に煩はされたことがあつたと假定しても、そして理論上からは、どうしても此の疑問を解き得なかつたと假定しても、彼は唯だ資本主義的生産の目的に往きさへすれば、如何なる難關からも脱し得たと云ふことである。スロニムスキ！が生産の『目的』といふ問題に口を込らした時、彼は反マルクス主義の痛たい所に觸れてゐる。これぞより細心な彼れの同僚が、何時も黙つて通ほり過ごしてゐた所なのである。此の問題に就いては既に詳説したが、何しろ重要な問題であるから、幾ら論じても、幾ら繰り返しても足りないほどである。

商品は交換せられる前に、先づ生産せられる。けれども商品が生産せられるのは、交換を目當てに、またこの交換によつて實現せられる價值を目當てに生産せられるものである。そして如何にして、また如何なる方法で商品が生産せられたかと云ふ問題は、交換に際して價值を定める上に、多大の關係がある。けれども此の際考慮せられるものは、生産物の有用性の問題ではないのである。資本家は聖書をもち生産する如く、チウインガムの生産に躊躇せぬことは既に述べた通り

である。けれども之れだけではない。商品生産の目的は、利潤の實現にあるから、資本家は利潤さへ保證せられれば、絶対に無用な品物でも喜んで製造するだらう。たゞ資本家が絶対に無用なものを製造しないのは、購買者を得る爲めには、何人かに取つて、何かの役に立たねばならぬからである。従つて其の品物が眞實有用であらうとあるまいと、資本家自身はちつとも構はない。唯だその品物が何人かに取つて、何かの役に立ちさへすれば、即ち賣れさへすれば、何故にそれが有用であるかは、少しも彼れの關心せぬところである。之は資本家に取つては、絶対にどうでもよい事である。彼はどんな型でも、どんな色合でも、どんな風味乃至は其他の性質のものでも、製造する。そして之を交換する——賣る——場合になつても、自分が生産し、そして今賣らうとするものが、白からうと黒からうと、橙色であらうと、其他の色合であらうと、乃至は四角だらうが丸からうが、尖つてゐるようが、其他の形だらうが、又は甘からうが酸いからうが、香りがあらうと無からうと、堅からうと柔からうと、其他この商品の特殊な效用を定める如何なる性質を持つてゐるようが居るまいが、彼は少しも關心せぬ。けれども彼はその品物が、どれだけの労働を含んで居るかに留意する。この事實は、『註文』を受ける——即ちまだ生産せられて居らぬ品物を賣る——交換する——『先き物』の賣買といふ營業法の場合に見ることが出来る。生産

者は賣りの交換をする場合に、型なり、色合なり、風味なり、其の他商品の有用性に影響する如何なる自然的の性質に就いての如何なる注文にも、喜んで應ずるであらう。之れは彼に取つては、全く無關心のことだからである。然るに事苟も商品により多くの労働を注ぎ込む必要のあることには、彼は強硬に反對する。資本家は諸君の注文を受ける——即ち諸君の財に對して、彼れの財を、見越して交換する——と、彼はその商品の有用性の決定する一切の自然的性質から『抽象』する。けれども彼は労働から抽象することは絶対に肯んじない。そして評價の場合には、労働を考慮に入れることを頑強に固執するだらう。更に彼は、労働の種類からは喜んで『抽象』するだらう。彼が若し一定の價格に對して、諸君に、例へば一百人十日間の労働を與へようとしてゐるとせば、彼は仕立師の労働でも、靴師の労働でも、諸君にいつれでも與へるであらう。けれども労働の分量の問題となると、彼は抵抗する。彼は我慢の出来る以上のもものは諸君に與へないだらう。

以上に詳説したような交換關係の實際の『經驗』は、ボエム・パークが過誤と認めたまルクスの『理論的』分析のうちに、完全に代表せられてゐる。交換關係に於いては、労働と有用性とのいづれに就いても、吾々は特殊なもの——特殊な労働と特殊な有用性——から『抽象』し、唯だ一般的の労働と一般的の有用性だけを殘すことは事實である。そして特殊な效用から抽象すれば、即ち吾

々は效用の性質から抽象した譯であつて、交換關係が純然たる分量の關係であることを示したの
 である。然しながら一般的の有用性を、分量的に測定することは出来ぬ。性質はそれが同一種類の
 ものでない限り、測定することは六ヶ敷い。そして異りたる物の一般的、抽象的の有用性を測定
 することは、絶対に不可能である。一臺のピアノと一揃ひの衣服とを比らべ、一脚の引出し卓子
 と一個の蒸汽機關とを比らべて、各々その内容に含まれてゐる異なる效用の額を、諸君は如何に
 して測定するであらうか。諸君は如何にして、一般的の有用性を測定するであらうか。若し諸君
 がそれを測定し得ないなら、それは價值の尺度にはならぬ。そして若し、それが價值の尺度とし
 て役に立たぬなら、それは價值の原因である筈がない。なぜならば吾々は、尺度で示された價值
 の變化によつて、初めて價值の原因を判定するのだからである。吾々は唯だ價值の尺度があれば
 こそ、初めて價值の存在そのものをも知るである。それのみでない。特殊な有用な性質から抽象
 して其の跡に残つた一般的の有用性といふ粕は、交換に關與して交換價值を決定する當事者に取
 つての一般的の有用性ではなく、何人かに取つての、換言すれば一般社會に取つての、一般的の有
 用性である。商品を交換する當事者に取つては、それは何等の使用價值をも持たぬものである。
 ところが労働はそうでない。吾々が商品に含まれてゐる特殊な労働から抽象する場合には、そ

れは唯だ労働の種類、即ち労働の質から抽象するだけであつて、労働の量から抽象するのではない。そして吾々の所要のものは、恰かもこの量である。なぜならば交換関係は、分量上の関係だからである。そして斯のような分量上の関係は、交換関係に踏み込む當事者に取つて存在するものである。抽象的、一般的の人間の労働は、量的に測ることが出来る。そして量的にのみ測ることが出来る。マルクスの分析の完全な所以は茲にある。商品の生産に用ひられた労働の、特殊な性質には無關係な抽象的な人間の労働こそ、交換價值の原因にして尺度である。そして此の抽象的労働の、唯一の尺度は時間である。

けれどもマルクスは其の論據を、決して純然たる理論上の推論にのみは置かなかつた。彼に取つては、論理は唯だ『經驗上の』實際の事實を、適當に分析し理解する道具に過ぎぬ。吾々は既に、『論理上の』命題としては、有用性は全く價值から除外せられることを見た。けれども吾々は亦た交換關係の『經驗』を考究して、そこには何等かの、有用性の殘留物——社會に取つての一般的の有用性——が残つてゐて、何等かの作用をすることを見た。しかも吾々は、それを論理上の問題としても、經驗上の問題としても、双方の上から、一般的の有用性なるものが、價值の原因でも尺度でもなく、また原因とも尺度ともなり得ぬことを見た。然らば其の作用は何であるか。自己に忠

實なマルクスは、苟も實際の事實を考慮に入れなことはない。そこでマルクスが、有用性が價値の要素たることを無視したといふのは、絶対に虚偽である。これはすべてのマルクス價値説の批評家が憶斷して居るにも拘らず、絶対無條件に虚偽であつて、マルクス説に對する理解が絶対に缺けて居ることが、近時のマルクス批評家の第一の資格であるらしいといふ幾多の證據に、更にもう一つの證據を加へたものに過ぎぬ。

社會的、一般的の有用性は、交換價値の上に或る影響を持つてゐる。けれども其れは、交換價値の原因でもなければ尺度でもない。然らば何であるか。曰く、その限度である。交換の事實、『交換關係』の『經驗』は、今日の資本制度の下に於いて、商品の交換に何等かの作用を營む唯一の有用性である。一般的社會的の有用性は、交換價値の原因でもなければ尺度でもなく、たゞその限度であることを證據立てゝゐる。そして之はマルクスの『理論上の』分析——ポエム・バワークをして、マルクスに對する日頃の尊敬的態度をも殆んど忘れさせるほど、それほど激しい忿怒を起させたこの『論理上の』分析——によつて確實にされてゐる。そして斯のような經驗と分析との結果こそ、マルクス價値説の主要な特徴である。然り、他の何ものにも優つて、この價値説を特にマルクスの價値説たらしめた特徴である。マルクスに従へば、價値を創造するものは、すべての労働

ではなくて、社會的に必要な労働であることは、既に説明したところである。更にまた『社會的に必要な』といふマルクスの觀念には、社會に對するその商品の一般的の有用性をも、相對的の有用性をも、共に含んで居ることを見た。マルクス説に従へば、商品の價值は、現にその商品のうちに含まれてゐる労働によつては測定せられないで、之を再生産する爲めに、社會的に必要な労働によつて測定せられる所以は茲にある。前章に於いては、吾々はマルクスの理論上の結論の歴史的根據を見たが、今や吾々は、その論理上、『經驗上』の證明を見るのである。

マルクスの謂ゆる抽象を以つて、證明を缺いたものとして非難し、マルクスが有用性といふ範疇を無視してゐると假想して、許すべからざるものとして非難することに於いて、最も猛烈な批評家その人が、同時にまた、『社會的に必要な』労働のみが價值の原因たる尺度であると云ふマルクスの主張に對して、反對の聲を掲げてゐるのは、如何にも奇怪である。彼等はその聰明にも似合はず、マルクスが有用性を價值の要素中に現に含めてゐるといふ、極めて單純な事實を見ることが出来ぬ。そしてマルクスが之を含めてゐるといふ其の事が、即ち『社會的に必要な』と云つた理由であるのに、彼等はこの『社會的に必要な』に對しても、同じほどの大きな聲で非難する。成るほど、見まいとする者ほど甚しい盲目はない。

マルクスは商品进行分析した結果、労働を以つてすべての商品に『共通な或もの』と見做し、従つて、労働を以つて價值の原因であり尺度でなければならぬと見做すに至つたものであるが、斯よ
うなマルクスの分析に對する主たる反對が、根據のないものであることは、既に説明した通りで
ある。尤も上述の反對論は、最も重要なものではあるが、しかも唯一の反對論ではない。マルクス
の斯ような分析に對しては、お馴染のエル・スロニムスキーと教授マサリックとは云はずもがな、
ポエム・バワーク自身と有名なドイツの經濟學者、カール・ディール教授の提起した別の反對論があ
る。そこで吾々は反對論者の名簿を漏らさず調らべ上げ、一々敬意を表するつもりであるが、其
の中の一人だけは茲には預かつておく。と云ふのは、先ず以つてマルクス説の他方面を説明して
置かないと、この反對論とこれに對する答辯とを、適當に理解し得ないからである。そこで此の
仕事は、特に其の爲めに充てた次章に譲つておくが、斯く云ふのは、マルクスの價值説と平均利
潤率の學説との間の謂ゆる『大矛盾』のことである。尙ほ折に觸れて、『資本論』第一卷と第三卷と
の間の、假想的矛盾を考察するの機會もあるだらう。

さて是等の反對説を論議するには、これまでの方針に従つて、他かに取り分けて注意に値ひするものゝ無い限りは、多かれ少なかれ、ボエム・バワークを目標として進みたいと思ふ。

先ず第一に注目すべき反對論は——マルクスの考察の範圍が充分廣くないから、その分析は勢ひ誤まつてゐなければならぬ、即ちマルクスは交換の目的となり得る全べの『財』を分析の目的としないで、單に『商品』、即ち労働によつて創造せられた財のみを分析したと云ふ反對論である。

この反對論者の主張によると、マルクスが其の分析を、最初から労働の生産物のみに限つたのは、彼れが事件の審理に先つて豫定の判決を下して居り、いやでも應でも、労働が唯一の『共通な或もの』として跡に残るようになしておいたものである。そこで若しすべての交換し得られる『財』に就いて分析を行つたなら、結果は違つて居つたらう。ボエム・バワークの言葉を借れば——マルクスは故意に、篩の目を通るものだけを、篩に入れておいたのである。彼はまた斯う附け加へてゐる——『マルクスは何故にその考察の初めに、交換價值を有する財の一部分を除外したかと云ふ事實と理由に就いては、用心して明白な記述を與へることを避けてゐる。』

先づ目に止まることは、ボエム・バワークが『分析』といふ言葉を用ひないで、『考察』なる言葉を用ひたことである。これは不注意な言葉の用ひ方の一例であるが、すべてのマルクス批評家は、

皆な此の道には秀でゝゐる。之は一見、何でもないことのようにであるが、實際に於いては、此の言葉の取り替へは、中々重大な事柄である。分析とは、或る實際上の現象の論理上の相對物を示す手段として用ゐられる、純然たる論理上の操作である。そこで分析は、吾々の抽象的推理の力を働かせて、個々の事實の集團に對する一般的概念を組立てるの用を爲すものであるから、分析は概括に到達する爲めの、有効な方法ではあるが、概括の正確を立證する證明とはならぬ。之に反して概括の正確といふことが、やがて分析に誤りのないことの、最良の證據となるのが常である。そもく或る問題に熟達してゐることは、何づれの現象が、現に考察してゐる主題に取つての、最も標本的の現象であるかを看取する技倆で分るのであるが、之は分析そのものによつては見出すことの出来ないもので、分析以外の資源から蒐集しなければならぬ。分析の目的に選んだ現象が、果して標本的のものであるかといふことの最良の證據は、通例、分析を終つて概括に達し、愈々この概括を證明する段になつて、初めて得られるものである。若し概括が正確な場合には、概括そのものが、やがて是等の標本的の現象の何であるかを明らかに知らしめるのである。

そこで苟も、適當な概括に到達する助けとなるものなら、如何なる分析も是認せらるべきものである。故に分析を行ふ場合には、分析せられる色々の現象に『公平』な權利を認めることを指針

とすべきものではなくて、唯だ一つの考へによつて導かるべきものである。即ち分析の目的に最もよく副ふような事實を見出だすことである。

既に前草に於いて、工業生産物を以つて、交換価値を有する商品中の最も標本的のものであり、従つて彼れの分析に取つての、最良の目的物であると假定するに就いては、マルクスは歴史上並びに論理上の、充分な理由と保證とを有することを見た。他の科學的研究の領分から一例を借りて見れば、水の化學的成分とこれに關する正確な知識を得る爲めには、吾々は出來得るだけ多くの種類の水を分析するの必要はなく、唯だ一種類、最も標本的のもの、即ち夾雜物のない純粹の水を分析すればよいのと同じである。マルクスの假定の正確であることの證明は、この分析の結果たる概括を立證するところの事實と、同じ事實によつて供給せられてゐる。なぜならば既に述べたように、マルクスは彼れの學說を説明する爲めには、この分析にも依頼しなければ、また其の他の純粹な論理的操作にも依頼せず、唯だ事實そのものに據つて居るからである。然しながら事實が何かになる爲めには、すべての事實を吟味し考察しなければならぬ。そこでマルクスは、その考察のうちに交換価値を有するすべての財を包括しなかつたといふ、ボエム・パワーの記述が若し眞實であつたとしたならば、マルクスの學說は立證を缺いてゐるものと謂はなければならぬ。

そして若しマルクスが、その考察から除外したところの財が、彼れが考察のうちに包括したところの財よりも、異つたものだと言ふことが證明せられたなら、彼れの學説は、完全に論破せられる筈である。

ところがマルクスの爲めには仕合せにも、ボエム・バワークの爲めには不仕合せにも、マルクスは『労働の生産物ではなくて、しかも交換價値を有する』これ等の『財』——といふのは土地その他の『自然』物にして賣買の目的となるもの——を漏らさず考察してゐるのである。

この特殊な部門（それは資本論中、約二百頁を占めてゐる）に於けるマルクスの考察が綿密周到なばかりでなく、これに對する論理上の説明もまた有力であつて、マルクス批評家中、たゞの一人といへども、ボエム・バワークといへども、曾てこれが論駁を試みないほどである。そこで吾々が、ボエム・バワークの眞意は、マルクスがこの特殊な『財』をその考察から除外したといふのではなくて、單にその分析から除外したと云ふ意味だつたらうと解するのは、彼れに對する非常な恩惠であると思ふ。そして彼は單に、全べてのマルクス批評家とは離れがたき因縁のあるらしい、例の悲しむべき不正確の犠牲となつたに過ぎないものである。

云つて置かなければならぬことは、吾々が此の點を詳論したのは、マルクス批評家中の最大な

ものですらも、如何に用語に不注意であり、如何に思想の精確を缺いでゐるかを『曝らけ』たかつた爲めばかりでなく、この反對論に含まれてゐる問題は、すべてのマルクス批評家の見るところでも、亦た吾々自身の見るところでも、極めて重大なものがあつたからである。この反對論は、要するに之だけの事に歸着する——労働價值説は『自然』を打算若くは考慮のうちに加へて居らぬ、『それは財の生産に、自然の關與することを否認する』、といふことに歸着するのである。そこで若し之が事實であるとすれば、容易ならぬ非難である。『財』にせよ何にせよ、その生産に自然の參與を否認することは、明らかに背理であつて、苟もこの背理に陥つた推論も分析も、乃至は其の論理上の操作も、たゞ其れだけの爲めに汚損する。マルクスは果して、斯ような罪科を犯したであらうか。若しマルクスが自然の存在を知つてゐた證據が必要であるならば——なぜならば此の非難は、畢竟、斯ういふ事に歸着するから——マルクスの無数の言明は、『財』の生産には自然が關與するといふ事實に、彼れの無智でなかつたことを示してゐる。然らばマルクスは、どうして之を否認したか、又どうして否認することが出来たか。固より彼は之を否認し得なかつた。そして又、否認もしなかつた。そこでボエム・パークを引用する。『彼等(商品)が労働の生産物であると均しく自然の生産物であることは、『商品は、自然的物質と労働との結合物である』と云つた

場合のマルクス、若くは「労働は父（物質的の富の）であり、土地は其の母である」と云ふペーの言葉を認容して引用した場合のマルクス自身ほど、明白に云つたものはない。正直な読者はよく當惑する。然し實際には、何も當惑するがものはない。マルクスは唯だ拙劣極まるやり方で、例の自家撞着をやつて居るだけのものである！。

若しボエム・バワーク自身が、其の言ひ表しに斯くまで不注意無雑作でなかつたなら、彼はマックスが自然の『關與』を口にする場合には、それは何時も商品の『體』、若くは『富』のことを云つて居るのだといふこと、又たマルクスが、商品を計量する據り所としての労働を云々する場合には、それは常に交換價值に言及して居るものだといふことに、氣が附いたであらう。マルクスは獨り労働のみが、富の泉源であるとは主張せぬ。然しながら之に反して、マルクスは交換價值の創造には、自然の『關與』を否認する。そしてマルクスの否認は正當である。『財』の生産に關與するすべての物質的の實體と勢力とを包括する自然は、常に存在し、依然として變化せぬ。富、こゝでは有用な品物の總體を意味すも亦、少くとも吾々の關知する限りに於いては、其の通りである。然しながら交換價值はそうでない。太古の昔から『自然』は存在し、そして人類の初まりこの方、この自然の上に労働が應用せられてゐたにも拘らず、この二つの者の結合は、資本制度の出現を見

るまでは、單純な『財』を商品たらしめるところの、交換價值を生産することは出来なかつたのである。そこで此の結果を齎らしたものととして、その説明に任ずべきものは『自然』ではなくて、資本制度に關聯した何者かであることは明白である。之れはマルクスが、前節に詳説したように、資本制度をそれ以前の制度から區別するところの、社會現象の探求に赴いた理由である。これに就いて興味のあることは、吾々は唯物史觀を論ずる場合にも、マルクスが『自然』を閑却したといふ、同一の非難に遭遇したことを思ひ出すことである。そして之はやがてマルクスの學說體系の一元的性質と、しばしば本書のうちに述べたように、すべてのマルクス批評は、いづれも同一の病弊に陥入つてゐると云ふこととを證明する、もう一つの證據である。

然しながら、マルクス批評家諸君に對して公平を失しない爲めに、こゝに云つて置かねばならぬことは、マルクス自身の味方、乃至は味方と思ふてゐる人々のうちにも、是等の病弊を可なり澤山持つてゐる者があることである。此の點は後ちに詳論する機會があらうが、茲には唯だ、當面の問題に直接關係のある歴史上の出来事に言及したいと思ふ。この出来事は、言ひ表しの選擇の上に行はれてゐる不注意の例證となると同時に、苟も此の種の不注意を見付けると、マルクスは敵であらうと味方であらうと、容赦なく『彼等を遣りこめる』實例を示すものである。一八

七五年には獨逸の社會主義者は、ゴータに開かれた全國大會に於いて、一つの綱領を採用したが、その冒頭には、『勞働はすべての富と文化との泉源である』といふ一節があつた。そこで領袖連から提出された此の草案の内容が知れると、マルクスは之に對して講義澤山の手紙を送つた。マルクスは先ず綱領中の、上に掲げた冒頭の一節を引用し、此の機會を捉へて次の如く述べてゐる。『勞働はすべての富源ではない。自然は勞働と同じく、使用價值(物質的の富は、この使用價值から成立つて居る)の泉源である。そして勞働そのものも、人間の勞働力といふ一つの自然力の表現である』。

マルクスの分析に對しては、尙ほこの他かにも反對論がある。然し今度は分析せられる物に就いての反對ではなくて、分析の結果に就いての反對である。商品はその物體の使用價值を外にしては、勞働の生産物であるといふ唯だ一つの共通性質を留めるといふ、マルクスの論述を批評するに當つて、ホエム・バワークは次の如く問ふてゐる——『これが果して、眞に残された唯一の共通性質であるか。交換價值を有する「財」には、この外にも、例へばそれに對する慾求に比較して稀少であるといふような、共通性が尙ほ残つてはゐないだらうか。若くは需要供給の目的物であるといふ共通性や、乃至は、是等の財は何づれも領有せられてゐるといふ共通性質や、または

是等の財は、『自然』の産物であるといふ共通性質が残つてはゐないだらうか』。そこでボエム・バ
 ワークは一步を進めて斯う云つて居る——『果して然らば、価値の原則は何故に、それが労働の生
 産物であるといふ性質に含まれてゐないで、上述の如き種々なる性質の何づれにでも、均しく含
 まれてゐることが出来ないであらうか』。この最後の問題、即ち『自然』の問題は、既に先刻、吾々
 が片付けた問題である。もう一つ前の『領有』の問題に至つては、ボエム・バワーク型の反マルクス
 主義者によつて吹聴せられるのは、少々奇妙な譯である。なぜならば、これはすべての物を自分
 たちで『領有』してゐる人達に取つて、面白からぬ論議の種になるものだからである。然しお望み
 とあらば、吾々は此の方面の問題に立ち歸つてもよいが、然しながら『領有』の問題は、本論の主
 題に取つては問題外である。先づ第一に領有せられると云ふことは、性質ではなくて状況若くは
 關係であり、面かもそれは『財』そのものゝではなくて、財に關しての人の状況、若くは關係であ
 る。それ故に『領有』せられると云ふことは、明らかに『財』の共通の性質ではあり得ない。けれど
 も既に見たように、言ひ表はしの精確と云ふことは、全然彼れの用意してゐないところであるか
 ら、斯ような瑣々たる點を捉まへてボエム・バワークと論争したくない。けれども性質にせよ、狀
 況にせよ、關係にせよ、乃至は、其の他のものにせよ、それが『領有』せられてゐるといふこと

は、敢へてマルクスの分析に對する反對とはならぬものである。『財』の『價值』の『原理』は、それが『領有』されてゐるといふことに『存し』得ぬことは、それが尙ほ『自然』の結果であり得ぬのと同じことである。『財』はそれが自然によつて生産せられてゐた間は、『領有され』てはゐなかつたが、しかも資本制度乃至は交換價値の出現に先つて、久しく既に領有せられてゐたものである。

『稀少』なこと、又は需要供給の目的物たることは、すべての『財』が共通に持つてゐるものとは言ひ難い。然し前述の如く、吾々は言ひ表しの精確や、其の他の論理的推論の要件のような些々たる事柄で、ボエム・パワーと論争したくない。けれども是等の二つの問題には、言ひ表しの精確などいふ問題以外の或ものがある。そして私は之に對して、讀者の注意を喚ばんとするものである——是等の二つの問題は、實は一つの問題である。慾求に比較して稀少なといふことは、需要供給の目的物であるといふことと、同じ事である。然らば何故に、之を別々の二つの問題に分割したのであるか。これは後章に論じる機會のある通り、マルクス批評家の用ひる『批評』の上の安つほい計略であつて、彼等がしばしば慣用するといふこと以外には、何等重要なことでもない。さも別々の反對論を提出してゐるかの如くに、同じことを違つた風に繰り返へし、斯くて多量の反對論を積み重ねて『コケ威士』をすることが、彼等の慣行となつてゐるのである。

吾々の見た如く、需要と供給は『財』の性質ではなくて、その存在の上の一事故に過ぎない。それは財のうちに包まれてゐるものでもなければ、又た、その生産と如何なる關聯をもしてゐるものでもない。財が『財』として持つてゐる性質は、需要供給の状態によつて、如何なる影響をも受けるものではない。苟も財に『共通する或もの』のうちで、その需要供給の状態と名づけ得べきものは一つも無い。なぜならば如何なる財も、それ自身のうちに、その供給の状況を包含してゐるものはない。又たその需要に至つては、財それ自身のうちに包含せられ得ぬばかりか、却つて財の存在せぬことを豫想するものである。そこで論理上からは、需要供給の目的であると云ふことが、價値の泉源にして尺度たる『共通の或もの』たり得るとは、云ひ得ぬ筈である。ところが尙ほその他かにも、需要供給は價値の泉源でも尺度でもあり得ぬもう一つの論理上の理由がある。價値が需要供給に左右せられるといふ立言には、多くの人々が、其の眞實の意義を明かにするの勞を取らぬほど、それほど『常識』でも分かる極めて單純なことのようである。けれども仔細に研究して見ると、それは理論上から不可能であることが明らかになる。そもく、需要と供給とは、反對の方向に働くものであつて、供給が増加すれば價値は減少し、供給が減少すれば價値は増加する。そして需要の場合には之と逆さまである。そこで今ま、需要と供給とが順當な状態、(多くの

財に取つての、普通の状態) 即ち需要と供給とが互ひに相殺する場合を假定して見たならば、此の場合には商品の價値はどうなるか。それは明かに零である。なぜならば商品の上に、反對方向に作用してゐる二つの要素——即ち需要と供給——は同等であつて、互ひに相殺し、互ひに差引きするからである。然るに吾々の知る如く、『財』——若くは、少くともその最も代表的な或る『財』——は、常に或る價値を有するものであるから、需要と供給とが互ひに差引きし、従つてそれは何等の影響をも有しない場合にも、尙は商品をして價値を有せしむる何物かど、他に存在して居ることは明かである。

この理論の問題は、事實によつて最も能く説明され、最もよく表明されてゐる。そもく價値は一つの相對的關係であつて、交換によつて確知せられるものである。吾々が商品の價値を云々する場合には、吾々はそれを、何か他の物に比較する——今日の高級に發達した社會では、吾々は之を一般的商品即ち貨幣と比較するのである。吾々が賣る場合、即ち交換をする場合には、吾々は一定の割合で交換することによつて、交換された物の價値を比較する。そこで今、何か二つの商品、例へば一脚の椅子と一個のテーブルがあるとする。兩者に對する需要と供給との状態が平等な場合、即ち順當な場合には、何時でも一個のテーブル二脚の椅子の割合で交換されるもの

と假定する。此の場合に兩者の相對的價値を定めるものは、果して何であるか。需要供給の狀態は、兩者ともに同一だとすれば、椅子とテーブルとは、一對二で交換せらるべき筈である。次に兩者の供給を、均しく五割づゝ増加したならば、この二つの者の價値は——供給の増加しなかつた他の品物に比較しては——減少する。けれども此の兩者の相互間の相對的價値は、依然として同一である。今ま、供給を増加する代りに減少しても、または需要を増加若くは減少しても、同一の結果を見るだらう。言葉を換へて云へば、兩者を如何なる需要供給の狀況においても、この狀況が兩者に平等である以上は、兩者は依然として一對二の相對的價値を維持するであらう。して見れば兩者の均しく隸屬する有ゆる需要供給の狀況の下に於いて、兩者の相對的價値を依然として同一ならしめる或ものが、彼等の裡に存在してゐるに相違ない。然らば、この或ものは何であるか。

彼等の裡に含まれてゐる『共通の或もの』——これぞ明らかに、彼等の價値の泉源たり尺度たるもので、是等の品物を支配する需要供給の狀況には關係せぬものである——を發見することは、やがて之れマルクスが商品の分析に着手した目的であつた。して見れば、恐らく『その裡に』商品の價値の『存在してゐるらしい』『共通の或もの』として、今ま更ら需要と供給とを指さすことは、

全くの兒戯である。

更にまた、同一の需給状態の下にある同一の商品も、その生産方法が變化すれば、時々その價值を異にする。そして之は現に、近世の生産發達史を満たしてゐる事實である。

然しながら讀者は、次の如き疑問を起すかも知れぬ——『需要と供給とは、價值の泉源となり尺度となり得ぬといふことは、成るほど本當らしいが、しかも尙ほ需要供給の狀況が、商品交換の割合、即ち商品の價值に影響を及ぼすことは經驗上の事實であつて、現に前掲の實例にも現はれてゐる。吾々は之をどう説明するか』と。この考へこそ、多くの經濟學者を迷宮に導いたものゝようである。實際、之は極めて紛糾した問題のようである。價值は需要供給以外に、何等かの泉源を有しな、け、れ、ば、な、ら、ぬ、こ、と、は、明、白、で、あ、る、が、し、か、も、需、要、供、給、が、商、品、の、相、對、的、價、値、を、決、定、す、る、と、こ、ろ、の、交、換、の、割、合、に、影、響、す、る、こ、と、も、否、ま、れ、ぬ。け、ど、れ、も、此、の、混、亂、は、外、觀、的、の、混、亂、で、あ、つ、て、眞、實、の、混、亂、で、は、な、い。そ、し、て、そ、れ、は、商、品、の、價、値、と、商、品、が、市、場、に、於、い、て、賣、ら、れ、る、そ、の、都、度、々、々、に、齋、ら、ず、特、定、の、價、格、と、の、間、の、區、別、を、明、ら、か、に、し、得、な、い、こ、と、に、基、づ、く、も、の、で、あ、る。

吾々は既に前章に於いて、價值と價格とは、異つた別々の範疇であることを詳説した。この區別は絶えず心に留めなければならぬもので、これを忘れた結果は、果てしの無い混亂である。そし

て此の區別に留意したならば、需要供給が價值の上に及ぼす外觀的影響は、單に視覺の錯誤に過ぎないことが、直ちに明瞭となる。即ち需要供給が影響を及ぼすのは價格であつて、價格は價值を標準的の安定點として其の上下に變動し、斷えず其の方向に中心を求めるものである。これぞ即ち、需要と供給とが相殺する場合に、價格が零とならぬ理由である。即ち此の場合には、價格はその標準的の安定點——價值——に納まつてゐる。そして此の場合には、價值と價格とが一致するのである。更に又、その品物が、同一の需給状態の下に於いて、千差萬別の割合を以つて互ひに交換せられるのも、同じくその爲めである。即ち同一な需給状態は、是等のすべての品物に對して、價格と價值との間に同一關係を生ずるに過ぎぬ。然るに個々の品物の實際の價格は、各々その價值に懸かるものであり、そして其の價值は、品物によつて各々異なるからである。最後に、同一な需給状態の下にある同一の商品も、その生産方法に何等かの變化のあつた場合には、各々にその價格を異にする所以も亦たこゝにある。なぜならば其の商品の價值は、その生産に懸かるものであつて、使用せられた生産方法の異なるに從つて異なるものであり、そして同一な需給状態は、價格と價值との間に、同一關係を齎らすに過ぎぬからである。

多くのマルクス反對者は、マルクスの學説は價格の形成を説明せず、從つて現に商品に支拂は

れる價格を説明する手引きとならぬと云ふことを主張する。然しながら價值の學説は、價格の形成を説明する必要もなければ、亦た實際に於いても之を説明することは出来ぬ。若しそれを能くしたなら、それは價值の學説ではなくなつたらう。之はマルクスの最大の反對者の一人たる、教授カール・ディールすらも認めてゐるところである。彼は斯う云つてゐる——

『價值と價格とが、決して同一物であり得ぬことは、マルクスに取つても、他のすべての價值問題の理論家に取つても、先づ出發點に當つて明かにして置かねばならぬことである。これは此の二つの概念の間の、根本的の相異から必然的に生ずることである。商品の價格は、一つの具體的數量的の測定であつて、それは其の商品に支拂はるべき財、若くは貨幣の數量を吾々に示すものである。價值は之に反して、一つの抽象である。吾々が商品の價值を口にする場合には、それは價格形式の根底に横はる規律的原則を意味するものである』(註二)。

要するに之は、吾々が既に引用した一節に於いて、マルクスの云つてゐるところのものである。

そして經驗の上の事實は、既に述べたように、マルクスの立場を充分に裏づけてゐる。マルクス批評家らは、事實は常に、そして全然、マルクスを論破してゐると主張して倦まぬが、此の場合に於いても他の場合(その或ものは既に片附けたし、また他のものは後ちに論及する)に於ける

と同じく、事實に訴へたなら、斯ういふことになるのである。

註二 カール・デイトル『マルクス經濟學說に於ける價值と價格との關係に就いて』。エナ、一八九八年。

(Carl Diehl, Ueber das Verhaeltnis von Wert und Preis im oekonomischen System von Ka-

rl Marx Jena, 1898).

ボエム・ワワークは云つてゐる——『經驗は、財の交換價值がその生産に費やされた労働の分量との間に、何等かの關係を保つのは、唯だ財の一部分に就いてのみであり、しかも此の部分の財に於いてすらも、それは單に偶發的に然るものである……そして之には、殆んど「法則」と云ふが如きものは何も残らぬほど、それほど多くの「例外」のあることを吾々は見るだらうと』。そこで此の次には、『經驗』と『例外』との長い表が掲げてある。吾々は其の一つをも洩らさぬように、順次に一々考察しようと思ふ。尤もこゝに、常に留意しなければならぬことは、是等の陳述、斷定、反對並びに例外は、決して唯だにボエム・ワワーク一人のものではないと云ふことである。否なボエム・ワワークは、謂ゆる事實の示すところについて、大法螺を吹き立て、倦むことなき武裝した同志の大軍によつて、有力に支持せられてゐるのである。

先づ何よりも先きに、こゝでも再び、『自然』が朦朧たる姿を現はす。吾々は既に、理論上では

彼女を片附けたのであるが、彼女は尙ほ彼處に留どまつて、實際上の『經驗』の方面で吾々を悩ますのである。斯く云へばとて、自然そのものが、交換價值を造ると主張せられる譯ではない。自然の一切の恩惠は、澤山さへあれば、空氣と同様に無代であることは認められてゐる。けれども若し自然物が僅少な場合には、何等の勞働もそのうちに費やされてゐないにも拘らず、それは交換價值を有すと主張せられてゐる。『或る地主の所有地に、隕石として落下した天然の金塊や、乃至はその所有地に、偶然發見した銀山はどうなるだらう？』。ボエム・バワークは斯う質問する。『地主は自然の賜物に頓着せず、自然は彼に、自ら努力することなくして與へたといふだけの理由を以つて、金銀を其の儘そこにうつちやつて置くか、または棄て去るか、乃至は再び恩惠物として他人に與へるであらうか？』。『一ガロンの純良なライン葡萄酒と安物の葡萄酒とは、生産の勞作は同一であるにも拘らず、前者は後者の價值の數倍に評價せられるのは、何故であらうか？』。そして教授クニースは斯う尋づねる——『一クオターの小麦は、一コオールドの木材の等價物として交換せられるなら、その木材が人間の勞働によつて人造林で生産せられたのと、原生林で野生に成長したとの間に、如何なる差異があるだらうか？』と（註三）。そして教授マサリックもこれに調子を合せて、『未開墾地は、何故に賣買せられるか？』と云つてゐる。

註三 カール・クニース『貨幣』Karl Kniep. Das Geld, p. 121)

讀者はお氣つきたらうと思ふが、是等の反對論者の論據としてゐるすべての例證は、黄金の隕石みたいな空中から引用せられたものを除いては、何づれも皆な、農業界から取られてゐる。けれども其れにも拘はらず、是等の例證のうちには、二つの異つた範疇に屬する物を含んでゐる。即ち一つの範疇には、労働なしに獲られることは、全然、偶然の出來事たる品物が屬して居るし、また今一つの範疇には、絶対に労働によつては生産し得られぬから、従つて労働なしに獲得することが唯一の方法たる品物が屬してゐる。そこで第一の範疇に屬する品物は、マルクスの立てた價值の一般法則に矛盾しないし、また此の法則の例外とすらもなるものでもない。偶然に或人によつて發見せられた金塊は、その生産に勞力を費やした何人かど遺失したにもせよ、または雲の上から落下したにもせよ、何づれにしても、此の金塊は彼れが辛らき労働によつて獲得したのと同じほどの價值を持つてゐるといふ理由で、決して放棄せられぬであらう。この金塊の價值は、すべての商品の價值と均しく、その再生産に費やされる社會的に必要な労働である。雲は吾々に、黄金の雨を降らすを常とせず、そこで必然に、黄金を獲得する一般的方法として行はれてゐるところのものは、其の生産に（嚴密に云へば、採集工業のすべての産物の場合に於けるが

如く、其の採掘に労働を費やすことである。従つてこの金塊とて、ボエム・バワークの勸告に従つて浪費したならば、二度と再び雲の中からは得られぬから、やはり労働によつて生産されなければならぬだらう。鑛山で発見された、銀の場合もその通りである。この鑛山の性質は、銀を採掘するに何等の労働をも要しないようなものであつたと假定しても（ボエム・バワークは、そう假定してゐるらしい）尙ほその銀は、普通に銀は採掘の労働によつて獲られてゐるといふ事實の爲めに、矢張り再生産に社會的に必要な労働によつて代表せられる價值を有するであらう。尙ほ茲に注意しておきたいことは、先きに記述したような價值の法則によれば、銀の價值標準を立てるものは、社會の慾求を満す爲めには是非とも採掘しなければならぬ、最も生産力の小さい鑛山で採掘される銀の價值であると云ふことである。但し生産力といふ場合には、銀の採掘中に、斯ような鑛山からあがるすべての副産物をも計算に入れての話であることは、云ふ迄もない。葡萄酒の場合も、銀と似寄つてゐる。『上等』の葡萄酒は、社會に要求のある場合にのみ、『安値』の葡萄酒よりも大なる價值を持つことは、銀と同様である。『上等』の葡萄酒の要求せられぬ所もあるし、銀が餘りに需要せられぬ所もある。斯ような場所では、『上等』の葡萄酒は『安値』な葡萄酒よりも、多くの價值あるものとは思はれず、また銀にしても、他の『下等』な金屬よりも、一層價值あるものと

は考へられぬであらう。『高貴』の金屬や『上等』の葡萄酒が慾求せられる社會では、是等のものは、各々特殊な産業の目的となる。そして最も生産力の少い銀山に於いて、銀の採掘に費やされた労働は、やがて銀の價值を定めるものである。なぜならば銀の再生産の爲めには、此の鑛山を用ひなければならぬからである。丁度これと同じく、是非とも用ひなければならぬ最も不適當な土壤の耕作によつて、上等葡萄酒を生産する爲めに費やされた労働は、右と同一の理由により、上等葡萄酒の價值を定めるものである。

之と同じ原則は、木材問題にも當て箴まる。原生林の『自然に生長した』木材が、社會の慾求を満たすに不充分であつて、樹木を『栽培』する必要がある場合には、すべての木材の價值を定めるものは、この『栽培』した木材の上に費やされた労働である。そして原生林の木は、栽培といふ手段によつてのみ再生産し得るものであつて、従つて『栽培』せられた木に費やさるべき社會的に必要な労働が、やがて此の原生林の木の再生産費であるから、それは人工的に栽培せられた木と同一の價值を有するであらう。

然しながら、第二の範疇に屬する品物になると、全然違つて來る。其の内の主要にして最も代表的なものは、土地である。生産の爲めに何等の労働も費やされて居らず、また其の再生産の爲め

にも、何等の勞働を費やすことも要せず、また費やすことも出来ぬ土地に、價值があるのは、何故であらうか。しかし之は決してマルクスの價值學説を論破するものではない。吾々は既に、マルクスが土地問題を詳細に研究して、一つの學説を樹立してゐること。そしてマルクス批評家らは、誰れ一人として、之が論駁を試みようとした者すらもないことを述べた。マルクス説の此の部門が、批評家によつて、殆んど何等の批評をも加へずに看過せられたことは、實際、不思議なことであるが、此の學説は要するに斯ういふことに歸着する——土地並びに其他の、勞働によつて生産せられぬ一切の物は、何等の價值をも有しない。之は吾々の知る通り、往々にして、途方もない價格が土地に支拂はれてゐる事實を前にして、如何にも奇妙に聞へるかも知れぬ。然しながら途方もない價格こそ、土地に支拂はれる價格は、土地の價值を代表して居るものではなく、全く別の何物かを代表してゐる證據である。マルクスは決定的に、地代は土地の價值から生ずるものではなく、また土地の價格は、明らかに地代の『資本計上』カピタリゼエションに過ぎないことを立證したのである。マルクスは又た、土地の價格は地代に一定の年數を乗じたものであつて、この年數は現在行はれてゐる利潤の歩合によるものだと云ふことに注意を促がした。この事實は、ボエム・バワークも述べてはゐるが、彼はこの事實から、當然の結論を抽き出すことを能くしなかつたのであ

る。言葉を換へて云へば、名目上、土地に對して支拂はれてゐる價格は、實は土地の價值を代表するものではなくて、地代の價格を代表するものである。そして形式上名目上は、土地の賣買と見える取引も、實は地代の割引に過ぎないものである。それは年金の購入と、徹頭徹尾、性質の違はぬものであつて、現存價值の交換ではなく、單に銀行取引に過ぎぬものである。これは土地投機者の熟知するところである。

土地が何等の價值をも有しないといふ學說の最も善い證據は、地球上の最大部分に於いては、土地は何等の代價をも支拂はないで、幾らでも手に入れられるといふ事實である。『事實』によるマルクス説の論駁のつもりで提起せられた『處女地が何故に賣買せられるや』といふマサリック教授の質問に對しては、次の如く答へられる——處女地は賣買せられて居らぬのが事實である。土地が賣買の目的物となるのは、處女地が淫姦されて男を持ち、地代なる私生兒を産んだ後のことであつて、決してそれ以前ではないのである。此の事實は労働によつて生産せられぬ物でも、尙ほ價值を有するともいふ主張に、一舉に止どめを刺した筈である。尤も、土地が價值を持たぬ爲めに價格なしに得られる場所に行くことは、吾々に取つてはなか／＼の難事たることは事實であつて、土地の無代な所のことを議論するのは、吾々に取つては、餘りに縁遠いことのようなのである。

然しながら何は兎もあれ第一に、今日の資本家階級が、人民からすべての土地を横領し、處女地としても、乃至は合法的な百姓の掌中にも、何等の土地も残されて居らぬようにした事は、確にマルクス説の罪ではない。第二には、吾々はマルクス批評家の大軍に向つて尋ねたい、地球の唯だの一個所でも、労働によつて生産せられたたつた一つの品物でも、それに對して等量物を與へることなしに、常に得られる場處があるなら舉げて御覽なさい、と。たゞに地球の全表面とは云はぬ。ボエム・バワークが黄金の塊をたゞで得ることの出来る雲の上でも星の世界でも、何人も椅子や上衣や、乃至は自轉車を、たゞで得られる場所を見付けることは出来ぬ。其處には明らかに、博學にして聰明なマルクス批評家の能く觀取し得なかつた相違がある。そして之は頗る興味あり、少くも或人にとつては、必ずや極めて教訓的なことである。

更に性質は異なるが、これと關聯して考察すべき他の一團の『商品』がある。是等の商品は、労働の生産物ではあるが、元來或る高級な自然の賜物または力の生産物であつて、従つて單なる労働では再生産することの出来ぬすべての物を包括する。即ちこの内には、すべて藝術上の作品や、之に類したものを含んでゐる。是等のものは、労働による生産乃至は再生産の目的物ではないから、勢ひ價值の法則に支配されないものである。

ところが或る器用なマルクス批評家は、マルクスの立てた価値の法則に對するこの『論破』、乃至は『例外』を見つけて大喜びの種子としてゐるが、かの不撓不屈のボエム・バワークも其の中の一入である。相も變らず、自分自身の混亂した天性に忠實に、苟も經濟學とは縁もゆかりも無い天が下なる一切のものを、徹底的に經濟學と混同するところの彼等は、先づ價値と價格との混同に出發し、尙ほこの上に、經濟學上の價格と、この價格なる言葉を、何物かに對する報酬としての一切の貨幣の支拂に應用した日常會話の上の價格といふ言葉とを混同し、斯くてマルクスの價值説は誤謬でなければならぬ、なぜならば、現にその『價值』が、勞働によつて決定せられぬ『財』があるからである、と揚言する。尤も之には、一つの功德がある。といふのは、常に高尚な『道德觀念』と『理想主義』とを見せびらかして、孔雀の如くに氣取つて歩るき、自分で勝手に決めた野卑な唯物主義と『惡平等化の』傾向との故を以つて、絶えずマルクス主義者を攻撃する是等の紳士諸君が、如何にして高き棲木とまりぎからおりて來て、その『理想的』の貨物を、最も卑むべき物質的の品物と同位置に置くかを見せしめることである。マルクスにけちが附けたいばかりに、彼等は尊い『思想』を體現した高尚な藝術上の作物をも、商賣の通路に流れ込むすべてのものと同じように、賣買せらるべき『財』であり、『貨物』と商品であることを力説する。けれども是等の紳士諸君

が、好んで斯くすることによつて、天才の作物が商品に變化せぬことは、尙ほ諸君の偽善的な文句が、人類進歩の方向を變化せぬのと同じである。資本主義的社會の經濟狀態は、その社會に於ける思想の全領域に反映し、そして彼處に、有ゆる種類の形の歪み亂れた事實を造り出してゐるが、何人といへども是等の事實に、眞面目になつて物尺ものさしを當てゝ見るほどの氣狂ひはない。「美術雜誌」は時として、美術上の大作が幾らに『賣れた』といふ譯で、その價格を載せることがあるかも知れぬ。けれどもシスタインのマドンナは幾ら幾らの蒸氣機關と價值が均しいとか、ゼー・ビ―・モルガンが美術の愛護者となつて『需要』が増した爲め、ラファエルやルーバンの繪の價值が騰貴したなどは、『商賣人』ですらも敢て云はぬだらう。資本主義の餘弊は有ゆる物に、金錢的精神の色彩をつけ、藝術を商ひの目的としたことは事實である。けれども其の爲めに藝術品が『貨物』とならぬことは、尙ほ娼妓の賣買が、愛情を變じて商品たらしめぬのと同じである。更に又た、是等の藝術家に對して支拂はれた代金が、價格及び價值なる經濟上の範疇と沒交渉なことは、尙ほ金ゆえの情けの報酬として、賣笑婦に支拂はれた代金が、價格及び價值なる經濟上の範疇と沒交渉なのと同じである。

之と異つた狀況を呈するのは、謂ゆる熟練労働、乃至は高級労働によつて生産せられた商品の場

合である。マサリックは或る一人の労働が、同一時間内に、他の一人の労働と同量の価値を生産せぬと云ふことを以て、マルクスの労働価値説を、全く論破したものだと思つてゐる。そしてボエム・パワーは、マルクスが『熟練労働は、唯だ単純労働を強めたものとして——と云ふよりも寧ろ、単純労働の倍數として——計算すべきものであつて、熟練労働の一定の分量は、一層多量な単純労働に等しいものと見做される。そして斯ような還元が不斷に行はれてゐることは、経験の示すところである。或る商品は、よしそれが最も熟練した労働の生産物であつても、その価値は、これを不熟練単純労働の生産物と比較して見れば、それは唯だ、後者の一定分量を代表するものである。異りたる種類の労働が、不熟練労働を本位として之に還元せられる割合は、生産者の背後に行する社會的過程によつて定められるものだから、従つてそれは習慣によつて固定せられて居るかのように見える』と云つたのは、驚くべき理論上の手品であると思つてゐる。そこでボエム・パワーは云ふ——『若し或る一人の一日の労働が、他の人の五日間の労働の生産物と同一の価値があるとしたならば、人々は之を何と思はうとも、確かにそれは、財の交換価値は其の中に體現せられた人間労働の分量に懸かるといふ、論定せられたる法則の例外をなすものであると』。

明かに是等の反對論は、マルクスの『論定した法則』は、商品の価値は、その商品の生産過程中

に、現に其の中に體現せられた労働の分量に懸るとするものだといふ、假想に出發するものである。そこで若し『論定せられた法則』とは斯くの如きものであつたとしたならば、是等の反對論の價值如何といふことは、茲には論ずる必要がない。なぜならば左様な法則は、曾てマルクスによつて論定せられたことが無いからである。商品^の價値^は、現に其の生産に費やされた労働の分量^に懸るものでないことを、マルクスが特に取立てて述べてゐることは、既に吾々の見た通りである。そして之は單に熟練労働と不熟労働との關係に就いてばかりでなく、不熟労働そのものに就いても同様である。上に説明したように、マルクスの價値學說では、商品の生産に現に如何なる種類の労働が、幾ら費やされたかは、その價値の關する限りに於いては、全然、どうでもよいことである。その理由は既に説明したように、價値は社會的現象であるから、どこへまでも、生産及び分配の社會的状況に懸かるものであつて、全然、個々の生産若くは個々の交換の状況にのみ關した如何なる事柄にもよるものではないからである。之は個々の生産者の負擔する労働の分量と性質とに對しても、また流通過程に於ける商品の變轉に直接携はる人々の特殊な願望と慾求とに對しても、均しく同一の效力を以つて適用することが出来る。果して然らば、熟練労働者の一日の仕事が、不熟練労働者の數日の仕事に相當する價値を生産し得るとい事實を楯にして、

熟練労働を以つて、價值法則の例外と見做すのは、明らかに不條理である。價值の法則には何等の例外はない。なぜならばマルクス批評家と、そして恐らくは或る自稱マルクス主義者との、曲解した想像のうち以外には、斯ような價值の法則は存しないからである。價值の法則の斯ような『論定』を正しいとしたならば、數へ切れぬほどの例外が出来るだらう。吾々は既に改良した生産方法を、それがまだ一般に採用せられぬうちに採用した場合、若くは時代おくれの生産方法を墨守してゐる場合の如き、重大な例外のあることをも述べた。このいづれの場合にしても、例外的の狀況の下に、普通の不熟練労働によつて生産せられた商品の價值は、その生産に實際費やされた労働によつて定まるものではない。更に其の他の『例外』も、聰明な讀者には、容易に氣がつくであらうが、すべて是等の謂ゆる例外に就いての面倒は、それが想像裡の法則に對する例外であつて、マルクスの價值學說のうちに論定せてれてゐる法則の例外ではないといふ一言で盡きてゐる。そこで或るマルクス主義者らが、想像的マルクス說に對する是等の反對論を説破しようとして、如何に無益の試みに精力を費やしてゐるかを見るのは、頗る悲しむ可きことである。彼等にして若し空理空論をやめ、マルクス說の誤り傳へられぬように氣を附けたなら、彼等自身にも讀者にも、一層有益に時間を費やすことが出来るだらう。そして是等の反對論は、おのづから消滅する

だらう。

要するに問題そのものは、極めて單純である。熟練労働は、その熟練が研究や練習によつて獲られる生産者の個人的のものであらうとも、若くは優秀な道具の使用による非個人的のものであらうとも、いづれにしても、より多く生産的である。熟練労働者は一定時間のうちに、不熟練労働者よりも多くを生産する。商品の價值は、その生産に費やさるべき労働に均しいものである。そこで既に説明した價值の法則に従へば、商品の價值は、その再生産に必要な普通平均労働の分量である。なぜならば、社會はこの商品を再生産する爲めには、この普通平均労働によらなければならぬからである。即ち熟練労働の分量は、勢ひ限定せられて居り、従つて所要額だけの商品を再生産するに充分な分量を得ることが出来ぬからである。そして此の熟練労働が普通一般になつて、商品の生産及び再生産の爲めに、何程でも得られるようになれば、それは最早や『熟練』ではなくなり、その生産物は、他のすべての平均労働の生産物以上の價值を持たなくなる。但し茲に記憶すべき點は、普通労働の尺度は、それが費やされる時間であるが、或る特定の商品に費やされた時間の尺度は、この労働の出費によつて生産せられた生産物の分量である。言葉を換へて云へば、商品の價值は、その生産に費やされた實際の時間、個々の場合の時間で定まるも

のではなくて、先きに詳論したように、その再生産に社會的に必要な時間に基づくものである。斯ように正當に解釋したならば、熟練労働の生産物が不熟練労働の生産物よりも、より多くの價値を有するといふ事實が、敢へて吾々の價値法則に對する矛盾でも例外でもないことは、尙ほ或る人の不熟練労働は、その應用の強度に相異のある爲めに、他人の不熟練労働よりも、より多くの價値を生産するといふ事實が、必ずしも吾々の價値法則に對する矛盾でも例外でもないのと同じである。

ボエム・バワークの提出した今一つの反對論は、吾々がこの處に最後に考察しようとするものであつて、且つボエム・バワーク及び多くのマルクス批評家らの反對説の、最も特徴的なものである。彼等は、その批評するマルクスの學說に對して、全く無智なといふことによつて、難攻不落に固めてゐるようである。彼等はその幸福な無智のうちに、しばしば頑是なき子供の如くにお喋りをし、人をして往々、憐むべきか羨むべきかに迷はしめる。ボエム・バワークは、極めて無邪氣に斯う云つてゐる——

『その交換價値が大體に於いて、その生産に費やされた労働と一致する場合に於てすらも、此の一致が、必ずしも常に維持せられて居らぬことは周知の事實であり、一般に認められて居るとこ

るのであつて、此の事實はまた、勞働説に對する今一つの例外を爲すものである。需要供給の變動の爲めに、此の種の商品ですらも、その交換價值は、そのうちに體現せられた勞働の分量に照應する價值の水準からは、或は上に或は下に押し出されることが屢々である。勞働の分量は、單に重心點を爲すだけであつて、商品の交換價值の一定不動の點ではない。私の觀るところでは、勞働説を信奉する社會主義者は、この反對論を過少視してゐるようである。彼等も此の點に言及してゐることは事實であるが、しかも彼等は、之を以つて些々たる一時の變則と見做し、斯ような變則があることは、敢へて交換價值の大法則に對して、どの道、重きを爲さぬものとして取り扱つてゐるのである。』

この一節のうちに露ぎ出されてゐる魂の單純さは、現世よりも一層高尚な世界のものとしか思はれぬ。そして正確だとか何だとか云ふような事についての、野卑なる現世的の觀念を以つて之に闖入するのは、殆んど罪惡に近いような感がある。況んやマルクスの學說體系を仔細に研究した上で、尙ほこの體系中の價值と價格との區別の擷めぬような人々に、マルクス思想の精緻を説明しようとして企てるのは、明らかに無益の沙汰である。個々の場合の價格、即ち實際の價格（ポエム・パワー）の言及してゐるのは即ち之である）は、マルクスに従へば、普通に價值とは異つたも

のである。然るに此の實際の價格、乃至は個々の場合の價格を捉へて、價値に對する例外呼ばりをするのは、よしこれを尊敬せぬまでも、その基本的の純粹性に對して驚嘆すべきマルクス説を理解することの出來ぬ、生れつきの無能を暴露するものである。ところが焉んぞ知らん、之がマルクス批評家の大軍を率ひて、彼等の爲めに進路を示し歩調を整へる主腦なのである！

第六章 マルクス価値學說の『大矛盾』

吾々は前章に於いて、マルクス批評家が、マルクスを『論破』する爲めに引用した事實は、よく吟味して見ると、却つて明白に、彼等自身を打ち破るものであることを見た。即ち是等の事實は、寧ろマルクスの學說と符節を合するものである。然しながら、之はマルクス批評家の攻撃を擋け止め、『論理』と『經驗上の事實』といふ武器を以つて、マルクスを攻撃しようとする、全ての人々を敗衄せしめるに足るものではあつても、進んで、マルクスの學說の正確を證據立てる、最高の積極的證據——マルクス自身とその祖述者との要求するような證據——を提供するものではない。マルクスとマルクス主義者とは、嚴密に過ぎ、峻酷にして假借するところなしとの非難をしばしば蒙つてゐるが、疑ひもなく、彼等はそれに相違ない。然し何よりも先づ第一に、マルクスは其の著述のうちに、冗長な反覆に耽つてゐるといふ非難をしばしば蒙つてゐる。そしてマルクスは、唯だその結論の正確を期せんが爲めに、苟も正當と認めらるべき有らゆる見地から、その問題に考察の歩を進めたのだといふ事を悟らないのである。マルクスが其の主張を、決して純

然たる論理上の演釋におかなかつたことは、既に述べたところである。マルクスは各々の場合に、事實の上に證據を求めた。そして論理上の演釋は、唯だこの事實を理解し説明するの用に供したまでである。けれどもマルクスは、證據を事實に求めるに當つても、かのマルクス批評家の解するような意味での、通り一遍の『經驗』の上の事實ばかりで満足しなかつた。是等の事實は、マルクスの採用するに先つて、當然彼れの結論と一致して居るべきものではあつたが、しかも是等の事實は、唯だ一見したところの證據を彼れに與へるに過ぎないものであつた。そこで歴史的觀念に忠實なマルクスは、眞の決定的證據は、是等の事實には求めないで、これを歴史上の事實——或は寧ろ、歴史上の連續と關係とから見た經驗上の事實に求めたのであつた。

彼れの價值及び剩餘價値の學說に就いても、この通りであつた。マルクスは、資本主義の生産方法の根底に横はるものは、價值の問題であると考へたので、従つて、價值學說が正確として受け容れられるが爲めには、唯だにそれが、有りの儘なる事實と一致しなければならぬばかりでなく、同時に、それは資本主義的發展を理解し、運動の狀態に於ける資本主義の事實を理解すべき、健でなければならぬことを主張した。それは資本主義の靜力學を説明しなければならぬばかりでなく、又たその動力學をも説明しなければならぬ。即ち、價值學說が正確として受け容れられる

爲めには、資本家の利潤の泉源と大きさを、唯だ今日あるが儘に示すばかりでなく、資本主義の生産及び分配によつて支配された歴史上のすべての時代を通じて、之を示さなければならぬ。苟も發見し得られるなら、是等の利潤の、種々なる變化をも説明しなければならぬ。利潤の發展を説明しなければならぬものである。

そしてマルクスの學説が、最大の勝利の記録を止どめたのは、實に此の點にある。哲學に於いても、マルクスの學説に、その神髓となつてゐる特殊な意義を與へたものは、その歴史的の性質である。然らば資本主義的利潤の歴史は、果して何を示して居るか。若し資本主義的利潤に關して明確に定まつてゐる事柄があるとしたならば、それは資本に對する利潤歩合の減少する傾向である。資本主義の發達と、資本額の増加とにつれて、利潤の形を取る資本の報酬は、不斷に縮少しつゝある。資本家階級の收める利潤の總額は、資本額の増加につれて不斷に増加してゐるが、使用された資本の全額と比較した利潤の額、即ち一定額の資本に對する利潤の歩合は、不斷に減少する傾きがある。之は即ち、經濟學に於いては『利潤率低下の法則』として知られてゐる。この法則は何處から來たか。利潤率の低下は、如何にして説明すべきであるか。マルクス以前にも以後にも、此の問題に満足な解答を與へることの出來た價值學説は曾て無いのである。マルクス

は當時の經濟學に對して、次の如く云つて居る——

『彼女(經濟學)はこの現象(利潤率の低下)を見て、互ひに撞着する説明を試みて悶えてゐた。けれどもこの法則は、資本主義的生産に取つて、極めて重大なものであるから、大なる神祕として、アダム・スミスの時分から此の方、すべての經濟學は、これが解決を中心として回轉する。そしてアダム・スミス以降に於ける經濟學の各學派の相異點は、この問題を解決しようとする企圖の相異に存してゐる』。

然しながら、マルクスの價值學説が、資本主義的生産方法の下に横はる根底を明かにし、この發達法則を白日の下に曝して見ると、そこには最早や左様な神祕はない。マルクスの學説は、唯だに満足な説明を與へたばかりでなく、斯ような説明は、マルクスの學説のうちから、自然に且つ必然に流れ出るものである。そして其れは單純であつて、且つ白日の如くに明かである。

資本家的『生産者』によつてその事業に使用せられる資本は、二つの部分に區別される。即ち其の一つは、彼れが其の場所や、造營物や、機械や、原料品などに費やすところのもので、今一つは、職工に對する賃銀の支拂ひ——耳障りよく『労働の雇傭』と云はれてゐる——に費されるものである。そこで第一の種類に屬する資本を『不變』資本と云ひ、第二の種類に屬する資本を『可變』資本

と呼ぶことにする。斯く名づける理由は、マルクスの學說に従へば、第一種の資本は、生産過程によつて變化されず、常にその分量が不變であるが、第二種の資本は生産過程中に變化——一層精密に云へば『増加』——するからである。既に示したように、價值を創造するものは獨り勞働であつて、資本家の利潤は、『剩餘』價值から來るものである。資本家が生産過程（彼れの資本は、この過程中に増加する）から利潤を收める場合には、この變化（増加）は、勞働に對する支拂に投資せられた資本によるものである。そして資本の他の部分、即ち原料や其他のものは、それ自身に變化することは出來ぬ。是等のものは、單に再生産せられるだけであつて、一定不變の分量である。そこで吾々は、資本主義的生産の發達が、この資本の二つの部分に如何なる影響を與へ、それが又た、如何なる關係を利潤率の上に有するかを見よう。

サア・ジョン・ブウランは、一八五〇年に靴製造事業に着手した。彼は假りに五百圓の資本で事業に取り掛かり、そのうち四百圓は建物や事業に必要な原料品の購求に費やし、残りの百圓を勞働者に對する支拂に費やした。吾々は簡單にする爲めに、彼れは一人に對して一週十圓づゝ拂つて、十人の職工を雇傭したと假定する。そして彼れの事業に用ひた資本の『回轉』は、毎週その製品の代價を現金に換へるといふ具合であつたから、彼は勞働に對しては、一週間の賃銀以上を

投資する必要を見なかつた。それから労働の生産物の状態はどうかと云へば、吾がブラウン氏の使用人毎一人の労働は、一週間に二十圓の価値ある生産物を造つたとする。(勿論、生産の爲めに消費せられた原料・その他の価値以上に、これだけ生産したのである)。

以上の如き條件なら、ジョン・ブラウンの製造した生産物の価値は毎週、二百圓であつて、其のうち百圓は『必須』価値(賃銀に支拂はれた額)で、百圓は『剩餘』価値であつて、この百圓が彼れの利潤である。(事實を簡單にする爲めに、彼は消費者と直接に取引をするものと假定して、利潤に對する仲買人の配け前は無いこととする)。この場合に『必須』価値に對する『剩餘』価値の歩合は一對一、即ち十割であつて、吾々はこの歩合を指して剩餘価値率、または労働搾取率と呼ぶ。尤もジョン・ブラウンは斯んな風には計算せぬ。彼は不正な手段たると正當な手段たるとを問はず、その職工に出來得る限り少しを支拂つて、出來得る限り多くを生産せしめることには興味を有するが、彼等の生産した剩餘価値が、その賃銀に對してどれだけの割合に當るかを知ることには、少しも興味がない。即ちジョン・ブラウンは良き實業家であるから、その企業に投資した資本が、どれだけの利益を齎らすかを知らうとする。そして彼は五百圓の投資が差引百圓、即ち毎週二割の純利潤(剩餘価値より成る)を齎らすことを發見する。

斯のような利潤を得てジョン・ブラウンの事業は繁昌し、彼は身代を積み上げた。今や彼はその祖先たちと共に安らかに安息し、今日はその息子にして相續人たる小ブラウンが事業の采配をふつてゐる。小ジョン・ブラウンは利潤を造ることにかけての、年來の老舗シニセを維持してはゐるものゝ、彼れも彼れと市場に競争する全ての同業者も、今では全く新らしい製靴方法を用ひてゐる。彼れの父が事業を始めた當時以來、新しい機械が發明されたが、この機械は高度に『労働を節約するもの』である。即ちそれは労働の生産力を増加したので、この機械の助けを借れば、一人の職工は、この機械を用ひぬ數人分の仕事をすることが出来るようになった。然しながら、この機械は甚だ高價である。またこの機械を使用するには、多量の原料を必要とする。なぜならば労働の生産力が増加すれば、これと同じ割合で、毎一人の職工の信用する原料が増加するからである。そこで小ブラウンの資本の『構成』——即ちその資本のうちで『不變』資本と『可變』資本として使用せられる資本の割合——は、事業創立當時に於ける、父ブラウンの資本の構成とは違つてゐる。小ブラウンは今や二萬圓の資本を使用してゐるが、其のうち一萬九千圓といふものは不變資本として用ひられ、僅かに一千圓が労働に對する支拂ひの爲めに用ひられてゐる。資本の斯ような構成は、資本主義の發達が、一層高い段階に達したことを意味して居るものであるから、吾々

は之を高度な構成と呼び、父ブラウンが事業を始めた當時の資本の構成を、低度な構成と呼ぶ。そこで斯のような資本の構成上の變化が、事業の利潤の上に、如何なる影響を與へたかを見たいと思ふ。

ジョン・ブラウン商會は、依然として、昔ながらの賃銀率を守つてゐるものと假定する。次に改良した機械の採用の爲めに（その結果として生産物の安くなつたことをも差引きして）、一人の労働の生産物の價值は、二倍に増加したと假定する。その結果はどうだらう。ジョン・ブラウンは一千圓の可變資本を以つて、百人の職工を使用する。そして毎一人一週の生産物の價值は今は四十圓であつて、一週の生産物の價值總額は四千圓である。このうち一千圓は必須價值を代表し、三千圓は剩餘價值を代表する。斯ように彼れの利潤は非常に増加したが、しかも其の増加は、資本總額の増加に比例した増加ではない。即ち彼れの利潤の總額は甚だ大きいが、利潤の率——每一圓の資本に對する収益の百分率——は、甚だしく僅少である。二萬圓の資本に對する三千圓の利潤は、一割五歩にしか當らず、昔に較らべて五歩の減少となるのである。

老ジョン・ブラウンと小ジョン・ブラウンとの事業の組織方法の相異と、この事業の組織方法の相異から來たる結果とは、一般に資本制生産の發達を代表する標本的のものである。又た正確に

それを例證するものである。それは利潤率低下の事實を示し、また之に對する説明をも與へてゐる。資本制生産の發達は、労働の生産力の増加から成り立つものであり、そして之が爲めに、資本の構成は高度となるから、資本制生産の發達は、必然に利子または利潤の率を低下せしめる傾向を持つ。なぜならば、利潤は唯だ資本の中の可變的部分からのみ得られて居るものであつて、この可變的部分は、不變的部分に比較して絶えず減少するものである。然るに利潤は、常に資本總額との歩合を以て言ひ表はされるからである。

然しながら上に掲げた實例は、資本の構成上の變化が、利潤率の上に及ぼす色々の影響を、悉く示してゐるものではない。資本の構成の上の變化は、之を放任しておいたなら、上の實例の示すところよりも、一層甚しく利潤率を低下せしめる傾向がある。といふのは上の例では、問題の條件を變更した爲めに、この法則の作用が、純粹な形で表はれては居らぬからである。先づ第一の場合には、吾々は労働者がその生産した價值の半ばを受けてゐるものと假定したが、第二の場合では、彼等は僅に四分の一を受けて居るものと假定した。そこで若し吾々が第二の場合に於いても、問題の條件を第一の場合同様にしておいたなら——即ち労働の半分が必須労働であり、半分が剩餘労働であるとしたならば——第二の場合に於いては、吾々が先きに假定したよりも幾分

低度な資本の構成——例へば不變資本一萬八千圓、可變資本二千圓と云つたような——を見ることとなる。そして利潤の歩合は一割五分ではなくて、僅かに一割といふことになる。

右は資本の構成の上の變化に伴ふ傾向を、純なる形で示したものであつて、資本主義的發展の實際上の事實を示すものではない。勿論右の例證は、大まかには實際上の事實を示してゐる。なぜならば資本の構成が高度となり、そして労働の生産力が増加すれば（資本の構成の高度化は、労働の生産力の増加を意味してゐる）、生産された價值のうちの剰餘の部分は従つて増加し、労働搾取の率は増加するからである。そして之は労働者が、前よりも安い賃銀を受けて居るかどうかと云ふことにも、また彼等の生活標準が低下してゐるか否かといふことにも、全く關係せぬ。彼等は事によると、實際上の賃銀では——即ち生産物では——以前よりも多くを受けて居るかも知れぬけれども其れにも拘らず、搾取の率は増加するのである。なぜならば労働の生産力の増加に伴ふて商品は安くなるから、労働者は賃銀として受けた同一額の貨幣を以つて、自分の生産した品物をより多量に購買することが出来る。けれども此の分量は、剰餘生産物として資本家の手に残る分量と較らべた割合から云へば、勢ひ漸次に少なくなるからである。前掲の實例では、労働の生産力増加の結果が、商品の價值を低減することをも計算に入れてある。若し之を計算に入れな

つたなら、資本の構成が斯ように高度となれば、生産物の價値の増加は、二倍以上にもなつたらう。そこで小ジョン・ブラウンの労働者は、同じく一週十圓の賃銀を貰つてゐても、今日は彼等の消費する生産物が安くなつてゐるから、彼等は同じ十圓を以て、老ジョン・ブラウンの下に働いてゐた彼等の父祖よりも、より多くの生産物を得るだらう。けれども其れにも拘らず、彼等が自分で生産した生産物の中から受ける配け前の割合は、父祖たちの受けてゐた割合の半分であつて、労働搾取の率は、老ジョン・ブラウンの時から見ると、三倍に増加してゐる譯である。これが即ち、資本主義生産の發達行程に於いて、實際に起つてゐる事實である。

進歩した機械を採用した結果として起こる労働の生産力の増加は、資本家をして、能く労働搾取の率を増加することを得せしめるものであつて、彼等は決して、此の機會を捉へるに躊躇せぬ。そして其の結果は剩餘價値の總量を増加し、従つて亦た利潤率をも増加する。そこで二つの傾向が交叉して居ることになる。即ち第一には、資本の構成が高度となり、剩餘價値を生ずる唯一の泉源たる、可變資本の額を比較的減少し、斯くて利潤率を引下げる傾向がある。第二には労働の搾取率を増加し、可變資本の使用によつて生産せられた生産物のうちで、剩餘または利潤として資本家の收得に歸する部分を増加し、斯くて利潤率を増加する傾向がある。資本總額のう

ちで、可變資本の部分が比較的減少すれば、労働搾取の率は増加する。然しながら此の二つの傾向の中で、第一の傾向は勢ひ第二の傾向よりも有力である。部分は全體よりも大なること能はず否な全體と同じ大いさたることすらも出来ぬといふ單純な理由だけで、第一の傾向は第二の傾向に打ち克つことは出来ぬ。労働搾取の率が如何なる割合を以つて増加しようとも、それは決して生産物全部を吸収することは出来ぬ。剩餘價値の存する爲めには、必ずや必須生産物、若くは必須價値が存しなければならぬ。そこで資本家が可變資本として使用する資本の割合を減少する以上は、必ずやそれは、よし些細にもせよ、利潤率の減少を來さざるを得ぬ。茲に於いてか利潤率低下の傾向を生じて來る。但し實際の上に、利潤率が果してどの程度の低下をするかは、多くの要素の協力によつて定まるものであるが、就中、資本家がその資本の構成の上に起つた變化の結果（即ち利潤率の低下）を差引く爲めに、労働搾取の率を高めようとする努力の成功如何といふことは、大に有力な要素である。

この利潤率の問題は吾々をして、謂ゆる『マルクス説の大矛盾』なるものと、『資本論』の第一卷と第二卷との關係に當面せしめるのである。そして此の問題の論議に入るに先つて一言したいことは、著者は他日別の著述に於いて、この全問題に新しい光を與へると信ずる、或る事柄を發

表しようとしてゐることである。マルクスは是等の事柄を、格別に論じて居らぬ。そして本書の目的は、マルクスの述べたまゝのマルクス説を紹介し、且つ之に對して批評家の述べたまゝの批評を紹介するだけのことであるから、右の事柄に就いては、茲には言及せぬ。但しその結果は詮ずるところ、茲に大體を紹介するマルクス説には何等の變化をも及ぼすものではなく、却つて之を布衍するものであることを附け加へておく。

抑々この『大矛盾』は、最初フレデリック・エルゲルス自身が組織的に言ひ表はし、聊か氣色ばんだ態度で世間に公表したものである。カール・マルクスの死後、一八八四年に出版された『資本論』第二卷の序文に於て、エンゲルスは當時のマルクス批評家に挑戦した。彼等は、マルクスは何等の新しい事をも言つて居らぬ、『資本論』の中にあるすべての金言は、ロドベルツスによつて、既にすでに發表されて居るところであると揚言した。(彼等はマルクスは、ロドベルツスから其の價值説を拜借したものだと推測した)。そこでエンゲルスは是等の批評に對して、それならば『如何にして、一律の平均利潤率が、價值の法則を破らないばかりか、實は價值の法則そのものに基づいて形成されることが出來、又た必ず形成せられるか』を説明して見よと挑戦した。エンゲルスは斯く主張した——若しマルクスが何等の新らしい事をも言つて居らず、且つ彼の價值學説が

ロドベルツスのそれと異るところがないとしたならば、是等の批評家は、ロドベルツスの著述をマルクスの著述で補足したものによつて、右の説明を爲し得る筈であると。この挑戦の結果は、多数の人々をして、この問題の解決を思ひ立たしめた。けれども此の事業を成就しようと試みた人々は、エンゲルスが挑戦したマルクス批評家ではなくて、反つてマルクスの學徒であつた。そして彼等は、此の問題の解決には極めて僅かの助けしか與へぬロドベルツスの著作を基礎とはしないで、反つてマルクスが『資本論』第一卷に述べた價值の法則を基礎として、之が説明を試みた。是等の著述家の功名心はエンゲルスが、マルクス自身『資本論』の第三卷に述べると約束した解決を先見することにあつた。一八九四年にエンゲルスが出版した第三卷の序文のうちに、彼はこの問題を解決しようとした種々なる努力を評論した上で、其の中の或る者、就中、一八八九年に現はれたコンラット・シュミット博士の本問題に關する著述の如き、可なり正鵠に近づいてはるが、要するに正確な解決を與へたものは一人も無かつたと結論した。エンゲルスは云ふ——正確なる解決は、唯だ『資本論』第三卷の中にのみ藏せられてゐると。

マルクス自身『資本論』第三卷に述べた此の問題に對する解決は、大矛盾を説明したものと見做されてゐるが、それは次の通りである。

いま社會のすべての生産領域を通じて、労働の搾取率は同一であり、またすべての生産領域を通じて、同一步合の剰餘價值が生産せられてゐるものと假定する。また種々なる生産領域に使用せられてゐる資本は、その構成の程度を異にしてゐる——即ち不變資本と可變資本との配合のされ方が各々異なつてゐる——ものと假定する。然るに其れにも拘らず、すべて是等の生産領域を通じて、利潤率は悉く同様であると假定したならば、問題は即ち——價值の法則が若しマルクスの立てた通りだとすれば、どうして斯くの如き結果を生ずるであらうか、と云ふことである。

若し茲に二つの資本があつて、一つの方の構成は $80c + 10v$ (不變資本九割、可變資本一割) であつて、今一つの構成は $10c + 90v$ (不變資本一割、可變資本九割) であり、そして搾取の率は双方同一であつて、同一步合の剰餘價值乃至は利潤を生ずるとしたならば、剰餘價值は(従つてすべての價值は)労働以外に、全く別の泉源を持つて居るべき筈であることは、明白である。そしてすべての經濟學者は、正さにそう主張してゐるのである。或る一定の時期に於いては、商品のすべての生産領域またはすべての流通領域を通じて、之に使用せられる資本の構成程度の如何を問はず、利潤率は同一であると云ふことは、既定の事實と見做されてゐる。言葉を換へて云へば、或る一定の時期に於いては、同額の資本は、これが使用せられるそれぞれの産業部門と、その産業部

門に行はれてゐる資本の構成如何とに拘らず、すべて同等の収益を齎らすものであると云ふことは、既定の事實と認められてゐる。然しながら——マルクスは言ふ——同一額の資本は、それが如何に使用せられても、同一額の収益を齎らすといふ假定的の事實は、この利潤は何處から來るかといふ泉源に就いては、何事をも指示して居らぬものである。けれども、矛盾が伏在してゐると想像せられて居るのは、實に此の點である。なるほど同一額の資本は、その構成の如何に關せず、同一額の剩餘價值を生産するといふことは、即ち價值の法則に對する矛盾である。けれども同一額の資本の所有者が、同一額の利潤を收得するといふことは、少しも價值法則の矛盾ではないのである。唯だ此の場合には、二つの資本は各々異りたる額の剩餘價值を生産することはしたが、價值の法則と兩立し得るような何等かの理由の爲めに、より低度な構成を有する資本によつて生産された剩餘價值の一部分が、より高度の構成を有する資本の所有者の手に移轉されたと云ふことさへ、證明できればよいのである。そして之ぞ即ち——マルクスは云ふ——うはべには同一収益の法則が行はれてゐる場合に、いつも實際に行はれて居る事なのである。

實際生活に於いては、異りたる有機的構成をもつた資本は、其の内に含まれる可變資本との割合に於いては、各々異りたる歩合の剩餘價值を生産してゐるものである。然しながら、或る一定

の資本によつて生産せられた剩餘價值は、全部悉くその資本の所有者の手に、その資本の利潤として收められるものでないことは、吾々の既に明らかにしたところである。吾々は亦た資本主義的生產と、交換價值といふ範疇とが、共に社會的性質をもつてゐる結果として、この剩餘價值は、生産された商品を流通過程を通じてその社會的到達點に齎らす任務に携はつてゐる他の多くの資本家の間に、分配せられることを見た。商品の全生涯の道程に使用せられたすべての資本は、いづれも皆な、その生産中に創造せられた剩餘價值の配け前に與かるものであつて、各々の資本の受ける配け前は、各々の資本の大きさに比例する。そこで各々の資本に對する利潤率は、その商品の生産及び流通に用ひられた資本總額で、剩餘價值を除いたものである。そして之は吾々が生産價格と名づけたところのものによつて 需要供給の法則を通じて行はれてゐる事柄である。そして商品はその生涯の或る時期に於いては、その價值通りには賣られないで、實際には、この生産價格で賣られてゐるのである。

商品は必ずしも、常にその價值通りには賣られないで、實際に於いては、或る經濟上の狀況の下には、或る經濟上の狀況の爲めに、常に價值とは別物たる、價格で賣られてゐる。そして資本家は自分の所有以外の資本によつて創造せられた剩餘價值をも、自分の資本に對する利潤として收め